常山紀談

十二

東京圖書館

和書門	雜史類	一三五五函	五二架	二六一號	一五冊

常山紀談卷之十一目次

一竹中重治心掛の事
一岑澤其謙信を撃んとせし事
一久世三四郎坂部三十郎物見の事
一野々口彦助物語の事
一石谷定清御供に參る事
一坪内玄蕃心得の事
一道化清十郎平野與兵衛に對面せし事
一谷太郎左衛門物前心得の事
一可兒才藏が事
一石田三成が事

一関白秀次公生害の事　附吉田修理が事
一木村常陸介最後の事
一秀吉有岡城へ使者に行きし事　附河原林越後山脇源大夫が事
一成田助九郎誅せらるる事
一秀吉公連歌の事
一三木牛之介鍬形の詩歌の事
一谷大膳武勇討死の事
一戸川肥後守秀吉公と負ける事
一黒田如水先見の事
一秀康卿伏見にて妓女國が舞を見給ひし事
一直江兼續が事
一石田三成直江兼續密謀の事
一兼續惺窩先生に逢ひし事
一石田が黨東照宮を謀奉らんとせし事
一細川忠興忠告の事

東京帝国大学図書館蔵

常山紀談巻之十一

備前國　湯淺新兵衛元禎輯録

竹中重治の人才續

敵に見分ル日

分ホ過ぎる價を以て馬を購ふべきなれ其馬ホ乘ぎる時能き追詰て飛下んと思ふ或ハ又槍を合せんと下り立時馬副心出て期を延す事あり此能馬ゆゑ知て名を失ふ事もあるべしかせ士ハ金十兩にて馬を購んとするに五兩にて求むべしとせしもあく飛下り乘放ちて能き時ハ捨もれば五兩の金にて又馬を求むべし馬にかぎらぬ此心得有べきなり身をも義にしたがひ捨るぞうつまして財寶をや塵芥に思ふ心掛常に有べきこそ士の本意なるべき

北條家の厩を預りし諏訪部と云ふ者度々功名あり何事の時も軍功や勝田八左衛門と云ふ者と二人物見に出る敵不意に出くつけ来ふ二騎引取る時諏訪部ハ馬を預る故勝田ハ馬に乗さる故乗切て馳帰る勝田ハ後に残る敵追詰る時ハ下立て相戦ふ味方助来れば勝田打伏られ頭半切れ敵引取るを勝田助らんと思ふ勝田手ゐ〳〵頭を持上げ見せ死せ[illegible]人々ハ奔て帰るやと聞て助け〳〵帰りて勝田も度々の功名あり後松平右衛門大夫小仕へ〳〵り○竹中が論尤士なる者の知べき處なり弓箭取身ハ朝夕に軍旅の事を論せん事あらまほしき事なり[illegible]べ必天の冥加に盡べきなり戦國に生れ人ハ其事に臨て功有て禄を得ることをあれ今泰平の時に生れ父祖の蔭おく禄を世々にするハ天より士に職を命ぜられたるなり天より命ぜられたる其任を忘れんにハ天の冥加に盡ん事必定なり又天下の四民の上にあり〳〵下に鎮る職にあらざるべき事にこそ

○

謙信の許に岩澤何某と云ふ士罪有て放逐せられしを越中の椎名小奉公し謙信越中へ師を出さるし時彼士叢に鉄炮を持て伺ひ居て[illegible]に鉄砲を傍に投捨て泣居たる謙信見出して岩澤めづらしく召れしかば仁君智将と討奉らんと存ぜし事悔しく成て候今遥小見奉るに先小屋形の心に背れ又かゝる設けを工み申事此上もなき大罪にて候とくく首を刎らるべしとひれ伏られバ謙信打笑ひ吾に智仁ハ相應せざる虚名なり疾馳帰りて椎名に[illegible]仕へよ[illegible]かの士越後に帰りて農夫と成て

一生と終ることやう

東照宮何きの時れ軍ゝや久世三四郎宣廣坂部三十郎廣勝二人と物見ゝ出しゝふ坂部ハ勇める色あり久世ハ氣色甚惡ゝ見えしゝば側より笑ふ人の有しゝ東照宮坂部ハ天性の剛ゝ者あり久世が及ぶ所ゝあらぬ事ども久世ハ人ゝ劣て生甲斐なしゝと思ひ定めゝる者あり其故ゝ務てなぶむゆる心と勞しゝて其ゝしき顕まて見ゆ今見ゝ久世坂部よりも敵近く進く行く見て歸ちゝ物をと仰ある處ゝ二人歸り參ゝるが果しゝて御詞の如くあり給ふ東照宮坂部ハ生得ゝ勇を頼ゝふしゝて懈あり久世ハ勵むとて味ひ深しゝと感ぜさせたひ給ふ

明智光秀が士野々口彦助山中鹿之介ゝ逢く功名せん事を問鹿之介物まゝゝハ必目の明ぬものあり能心得らるるゝふ彦助させる事と

もあらぬ其後何きれ戦ゝや川際ゝ野々口打出ゝる處ゝ朝霧ゝ

あひきて物色見え分ま時ゝ山中が教へゝ事と思ひ出ゝ手綱とひ

久爰ゝく目が見えぬゝゝひゝゝ吾後まゝるかゝんゝゝ目とふさぎ心

と静めゝく目とひゝきゝるゝ川の半ゝ物具ゝきる武者大差物と指て

只一騎渡ゝ来ると見付く心もさハやうに目も明らか成ゝ押並べく

引組でおち首と取ゝ後ゝ彦助是も我真實の功名ハあゝく彼

敵大さゝ物ゝ身の疲きく輙く我ゝ組敷まゝるかゝん彼敵も物前

ゝ目が見えぎりつらんく語りき

石谷十藏定清ハ先祖ハ遠江石谷村の人かり大坂御出陣の時江戸ゝ

残させるひしふ御跡より従者一人ゝ具足箱と脊ゝ負せ自ら槍弦

荷ひく潜ゝ江戸と出駿府ゝく追付奉ゝり兼て心易らゝゝ御近

習の人ふたゝび江戸に残り申事口惜く存重ね御法を破りて参りぬ首と刎らるゝ人事ハ素より覚悟なる事なれバいかゝ御咎蒙らんとも露なりとも悔む事ハ候まじと申上てあり候へといひしかバ将軍よハ殊に法制を厳に思召さるゝ事ハ爭ら御ゆるされの有べきかハ御宥あらんに御あとより引つゞきて追々ふ来るべけれバ必烈しく刑ふ行ハるゝ事なれども捨置べき事なるゝバかくと申まゝ台徳院殿黙しなをられ十蔵ハ既に召ゞ事聞えたる上ハ今夜ゝ明朝ハ首と刎らるゝんと相待居たりしふ十蔵ハ召ゞ思ひ極めて進み出ぬ如何して法を破りたるやふく死奴哉切て棄ずやと思へども若き者なれバゆるゝ仰出されて黄金二枚賜りて江戸へハ重ねて誰人ともなれ一人も忍びて御供に参らんバ重罪たるべしと固く仰出されたり

石谷十蔵定清坪内玄蕃に向て度々の功名世に高しあハれ心掛まく功名と遂べき道もあらバ教へらるゝ坪内聞て能こそ問れ人々事に臨て神の力と頼ハ八幡々々と云我ハ又頼ハ相ゞのまゝ成就せじと思ふ人ハ我ハ毎も八幡と神を刺通さんと一筋に思ひて後まと取ざりしとひたるゝ

道化清十郎ハ美濃の人ふ信長に仕へて度々武功勝れたる故に信長清十郎が指物に無双道化と四字と書て與へらるゝ世の人無双道化と云り平野與兵衛ハ齊藤家の士なれども是も武功誉れ高く信長是を招きて時人々往て平野ふ對面なるに道化も打連て物語せしが道化いとく御身ハかゝるに先立引ふ殿るゝ聞其趣と委

く語て教へられしかば平野更に心懸故にも候へば齋藤家に冥加に叶ふ士は皆々討死して吾生残て重ての軍には必死と思ひつめても武勇の不足ゆゑに死と道き今日の問にあひ恥の上に恥にあひ候こと恐へ入バ只今の咎至極の道理にて候先かけ後殿は必死と不志して成ぐこと

と大に譽て感じあり

谷太郎右衛門は武功の士にて黒田家に客の會釋にて招き置谷ゲ曰軍に場少く先敵より味方に氣を付べし一人先に進出踏こゝろ

處に跡より二人三人行重らば始出る者と強くとゞまるべし其處へ行べ

こゝに吾は又別の所に獨踏出してこゝに居るべき志なくばらくすき

バ又其處へ味方つゞくぞと又日比心安き人のつゞ主君に寵愛せる

こゝも軍場にて其人のかくに寄べしに必獨立の心得なべし又士

は弓鉄砲に上手といふとも事好む事にあらぬ敵と打立こゝき時或は城へ

射込さき事のあんに足輕は進ぐに故に人とにして命のいらん時射あ

てさるべ面目なく危き場は敵も堅く守る故に多くは犬死する事なり

と云

可兒才藏吉長は尾州可兒山の人にて大剛に者なり篠を指物にして首

を取て篠の葉を口中に押込投棄て後の證とせり故世の人篠に才

藏といひ連ふ關白秀次に仕へ長久手の軍に秀次引退きしに岡本嘉介

村善右衛門等踏とゞまりて支へしに才藏ぶ来ると見て山に倚かゝる

心地せしなりさて才藏殿は何方にぞと問て其退きしる方に行左

り目前の敵を見捨て引退しは聞しにも似ぬ才藏なること論ずるが

或日聚樂にて語て出しに才藏はいかゝる所存有しやと問て才藏聞て

何心なく殿の跡を慕ひ来りし者なりき今人々の論を聞て尤なりさらば暇申して宿へも帰らず直に立去りし後は福島正則招て七百五十石の禄を與へらるる才藏が下人に久右衛門といふ剛の者あり才藏其禄の半分を與へ竹内久右衛門といふ才藏が墓藝州廣島に在と云

石田治部少輔三成は近江國石田村の百姓佐五右衛門といふ者の子にして幼けなりし時佐吉と呼ひしが家貧しく近き邊りの寺にやりて在りし或時秀吉彼寺に行て佐吉が明敏なる故呼出して側に仕へしが頻に禄を増し水口四万石與へらるる後三成に人数多招きしかんと問きしに島左近一人呼出し候と申て秀吉を見て世ふ聞なる者なり汝が許に小禄にて奉公すべきと云れしかば三成禄の半分を分ち二万石與へ候と答ふ秀吉聞て君臣の禄相同

云事むつかしきと聞も傳へ聞いさぎよしと其志を感じて汝は仕へしやと計ひ給れと深く感ぜし島を呼出して手づから羽織を與へ是より三成に能く心を合せよと云給へり三成佐和山を賜はる時島に禄増與ふべきよしいひ給へども禄更に不足なる候ハば他の人々に賜り候へと辞しけり左近が父もし室町将軍家に仕へ江州高宮の傍ふかひなきさまにて隠居しを三成招き出しけり

秀吉秀次を養ひて関白を譲り夫より大閤と申て文禄二年秀頼誕生あり秀次よろしからぬ事どもさまざま有りしかば文禄四年七月八日三成太閤の前に出て関白の謀叛既にあらはしなして證を正しさる書を見せ申せば太閤怒て宮部善祥坊堀尾吉晴等に下知して

疾伏見ふ来らるゝ一先高野ゝ退き申ひらきあるゝ二ッの中ゝと云送らまゝらば秀次畏て義り候ゝて其後栗野木工頭秀用白江備後守成定熊谷大膳亮直澄三人ゝ此事いかゞ有べきと問るゝ白江聞もあへず殿下只今聚樂ゝ出ん事然るべく候此三人の中一人伏見へ参りて犯さぬ罪と申開べ一かるべ討手来らば防矢射て思召定めゝきん外他あんやと申ければ熊谷此謀尤さる事なれども帝都の騒ぎとなん事其恐るべきゝ謀叛入といまゝんも口惜るべ一父子の礼儀なれば都ゝ出て東坂本ゝ趣き護者と糾されん事を申べ一御許されなくば唐崎濱ゝ打出て勝負を決するの外道なしとぞ申るる栗野只今危きゝ逼て宥を請ども聞入らまゝ迚も道なぬ所なまゝば今夜伏見ゝ押寄て屍を城ゝ内へ

婦人の縊まゝて死るゞ如くなんハ口惜き事なりと申れども秀次これ用まゝて高野山ゝ赴きるゞ

一説ゝ吉田修理此時申るハ謀叛真實ゝおもまゝば人数一万我ゝ付らまゝ候へ今夜伏見ゝ夜討一て只一時ゝ城を乗破るべ一といひれども聞入ざり一と申て修理後ゝ越前秀康卿ゝ仕へ大坂陣ゝ忠直の供一て先陣をり五月五日天王寺口の御先手加賀利常ゝ命ぜ一れ一らば忠直甚念らまゝ一時本多伊豆守然らハ明日真先うけて加賀の軍兵と蹈越えあらふ儘なる軍せんかゝる事ハ吉田修理よゝ決断まる者ゝ候ゝて呼出ければ修理聞もあへず夜も短く候早支度一て打立べ一人々續うまゝと言捨て己が陣所ゝ帰るゝ否やひらくゝと物具一先ゞけ一て加賀の軍兵の押行所ゝ修理

馬と乗寄せ今度の命ニハ岡山表を加賀天王寺表ハ越前の三河、守先陣と兼より各ハ志ざるやと言ものへば真一文字ニ押破りかけ抜ンとバ越前の軍兵おーつづく修理ハ今日必死と思ひ定め居たる本多忠朝の陣より鉄砲と打かけるとひとしく死やくと聲々ニ呼て り真田が陣と切崩し北ル敵と追ッかけ天満川の深ふニ馬と乗入き溺死し給ふ

青巌寺ニ〻自害あり かの三人ハ所々にて自害せり是三成太閤の没後世とくつがへるべ紀を先ニ先関白を失ひ給ると後ニぞ人申る関白秀次高野の青巌寺ニ〻自害ありなるバ事を司ル寵愛せられし人々所々にて誅せられ自害しる中ニ木村常陸介師春捡使の松田勝右衛門ニ向ひ今度関白聚樂と出ふ伏見ニ趣をなん定めらるしし時師春申ハ太閤御對面ざるおぼ〻しまさんよハ讒者のわど明らを給ハんさるも夫まぞハ中途より遠國へ放流せられのふかひなく御身と白刃ニ伏なん必此二ツの間なるべしあり太閤の使者と斬ふ捨諸将の妻子聚樂ニあると人質ニ取罪る死事と申開ふせのふをしなんニハ和睦も堅く定より又戦ふも勇名を遺さべし空しく聚樂と出させのふ様や有べきと再三諫め申られども吾太閤ニ敵する心なくして兼引候ハざり死然まぞ関白ニ於て異心なしまぢる事明らかなり此旨を達して給ふ赤バ其恩黄泉の下ニも忘るべふと云置ると松田折と得ふ秀吉ハ申られバ太閤木村が志を愍ふ妻子ハ米百石と與へふ京都誓願寺の近所ニ住居せしとぞ

○秀吉信長の使者として荒木村重が有岡の城に来る村重が士河原林越後守治冬猿めがつたはしひ遂にハあさとなんぞ今刺殺ん事易かんと村重にさゝやけるもの村重聞入ず此事を秀吉に語りたるバ秀吉治冬を呼出して懇に詞とかけさせる脇指を抜き引出物にぞ一きり切る村重指替のなりてと云ぞ秀吉吾刀一ツを頼て信長ふ奉公する者に非ずとゝ云れ切り後秀吉世を平げて治冬を深く惡ゝけゞ一出して殺されたるに治冬君の為に其仇を除くハ武士の常也事なり秀吉舊き怨を忘れ無道なりとゝひて死せり

秀吉河原林に與へられし脇指ハ三條吉廣が作なり河原林が舊友山脇源大夫重信に傳へたり山脇ハ摂州の人幼少より勇名の聞えあり甲州に往て内藤修理が許に在其後摂州に歸て荒木摂津守村重に仕へ頻に用ひられて長臣たり村重神田伊賀守を軍の時神田が軍奉行郡兵大夫ハ勝れし剛の者なるを毛付して討取さり九首数九十八取て首供養三度せしとなり荒木亡て重信中川清秀に許に隱れ居たり清秀の妻ハ重信がをぢなり前田利家柴田勝家丹羽長秀一万石を招きしかども引籠て応ずしを護國公池田信輝公懇に招きをひしかバ来り仕へ山崎合戦に明智が士大将丹波國ゆく山にひらる城を預て居たる村上源之丞と馬上にて槍を合せ山脇が槍八十文字にて村上が馬の額に疵付馬飛出るバ源之丞馬より落るを役者かけ来て助るを源大夫詞をかけ村上を引組る所を味方数多もち合て村上が首を得たり其後も功名有て士三十騎の将なり

○秀吉北國に赴きし時丹羽長重の小松城に立寄るに長重の士成田助九郎と云ふ者あり秀吉先殿を北陸道の管領にせんと志津が嶽にて約束ありつるを加賀二郡越前若狭を賜はぬ先殿過ぎぬひて後小松十二万石に減じ既に滅亡に近しとも申べし秀吉の不義憎む に餘あり臣ふ討手仰付らるよ輙く刺殺べしと云ひ給ども長重聞入ぎしに止まると秀吉いろいろして洩聞き給ん大に怒て成田と憎む事甚しかりなるべ成田小松を退て伊勢の朝熊ふ隠まゐりしを終ふ搜出して殺されけるを成田が子半左衛門長重に仕へて小松の軍ふ戦功あり

○秀吉或時紹巴ふ向ひ吾發句せん汝脇句せよと奥山にゆみぢふるけなく螢とぜしを

ふるくも見えぬ燈火のうげ脇紹巴の句なり

紹巴螢ハ鳴虫に候ゆゑ申秀吉聞て螢に聲なくとも吾鳴せんとせば鳴ゆゑてや有べきと云給しに時細川幽齋かくへよりの武藏野やあのをつるゆてふる雨に螢より不ろかく虫もなしとよめる歌の候と云給まれば秀吉悦給と

此歌ハ螢の聲あるとふ心にハあらゆ雨降る夜ハ皆虫の鳴止むを光の見ゆる螢よりかく外虫なりしと云ふ事なり

三木牛之介ハ畠山高政に仕へて剛の者なり五尺ばかりの鍬形打たる冑を着て運在天見敵無退又人々只ちに出ぬ故に我よりなれ軍に ぞあるも先ゞけをせばとよめる歌を鍬形に書給しゆ天文十一年正月河内の合戦に一番槍を合せ敵の大将を討取給ひ天文十六年七月廿三日

三好政勝入道宗三と舎利寺の軍に討死し給ふ後此歌の事を秀吉小物語する人有りれば秀吉歌の趣意よろしからぬ吾なれば人はきぶきぶし出るこゝろかりなき軍の時も先がけをしてとゝまるべき物とゝゝれなり

○

天正六年秀吉播州三木の別所長治を撃つ時谷大膳ハ濱手の大将なり兼て大膳ハ寄騎にて秀吉望まれしうるる信長許さゞして加勢ならしめらる大膳敵三騎と馬上にて槍を合せ皆討取り秀吉疾かさの丸出丸の名攻らるゝゝゝゝゝバ大膳城堅固にして容易に攻取難しと答ふ秀吉日頃勇名高き大膳小城一つ破るゝるやと詞をかけらるゝれば大膳も怒り秀吉も既に刀の柄に手を懸べ色なりしば竹中半兵衛立ふきゝ戦場の勝負こそ力を盡すべきにいるる事ぞゝゝ處に

蜂須賀孝右衛門も来りて秀吉の轡を取て押返れ夜に入て秀吉酒有と持せ〳〵大膳が陣屋に至りふの武功抜群なり先の問答ハ我過なり後悔大方なべ〳〵て懇情甚しく其後大膳手勢を率てかゝの丸へ攻かゝる城中ハらゝと大事と防ぎ矢石と打出せども大膳少しもひるまず士五十騎歩卒二百計一の城戸口を押破れば手負死人数をらべ寄手押ぬけば大膳念なく乗破りるが数ヶ所手を負て踞居る所に法師武者猩々緋の羽織着るが引返して大膳に向ふ大膳吾疲れるり近寄て首を取て高名にせんとゝゝと聞支懸りて一太刀打つ大膳敵の草摺を取て引寄せ脇指を抽て刺貫く處に別所が士大将由井小兵衛と名乗て引返して馳来て大膳を一太刀斬らるる處へ大膳が嫡子出羽守十七歳なるが走寄てみられて由

井と打て芝居に打もたを押へて首を取父に向へば大膳も息絶て出羽が父の死骸を陣屋に入て取る首を秀吉の實檢に備ふ秀吉大膳が討死せし由を聞てせめて死骸にたりとも對面せんとて陣屋に行惜き人を討たるよしにて涙ぶむせられたり

秀吉家譜に載たるには大に異なれども此一條は谷の家に傳へたる說なる由なれば家譜は誤なるべし

大膳は江州犬上郡の人信長に仕へて川尻肥後守稻葉伊豫守と同じく軍の評定の人に加へらる十四歳より四十七歳まで捨を合する事九度首を取事十七度なり

浮田秀家伏見にて秀吉を饗したる時廊下より行く處の白砂の上に戶川花房を始として並び居て拜謁に秀吉戶川達安に吾を

おへといへるまし〻ば戶川秀吉を かきあふて書院に入たり秀吉かるるふるまひ多うしてして古代家々の禮儀を多く失ひる少

秀吉病重かりしかば朝鮮渡海の軍兵を引取んと計らるる時朝鮮へは必德川殿赴かせ給べしはちかべ日本は自ら德川殿に歸服せべしと人々いひしに處に思の外に秀吉石田三成に命ぜられて朝鮮に赴きけりさては日本の權威は三成に歸ぬべしといひしに黑田如水獨是を然りとせば朝鮮の事三成是と兼ねて日本は德川殿の掌の中にありと覺ゆ三成是より伐て人是を嫉まん然らば德川殿の仁德に靡き從ひて日本は自然と德川殿に歸服せんといふまし〻ば果して然りき越前の秀康卿伏見にて國といふ妓女を召て舞はれし時襟に加

けゝる水晶の珠数見苦しゝ化として物具の上にかけらるゝ珊瑚の珠数を賜はりゝるが志ぐゝし舞ゝる時頻に涙を流しゝゝふ人々怪しゝゝられだ秀康卿今天下に幾千万の女あまたゝる天下一の女と世に譽らるゝ名高ゝ化ハ此女なるゝ吾天下第一の男と世に聞えたるあの女にさへ劣る果しるとゝもハハ泣きるゝと仰有りるゝ

越後の士大将直江山城守兼續ハ朝日将軍義仲の乳子樋口次郎兼光が末孫なるゝ謙信に仕へゝ景勝に至る景勝奥州にて百万石を賜ふ

一時米澤三十万石を直江に與へらるゝ倍臣の中第一化大禄なり長高く容儀骨がらゝ双なゝ辯舌明らゝゝ殊更大膽なる人なゝ且文藝に也晴らゝ化五臣注の文選ハ此人板行させるとなゝ詩をも作るゝ

春雁似吾吾似雁洛陽城裏背花歸などいふ句も世に聞えゝゝ伏見の城にて諸大名幾等も並居るる中に伊達政宗懐中より金銭取出して人々に見せゝゝに其頃金銭の始にゝ珍しゝゝ

やがて直江が末座に有りとあき見られしゝ有り時直江扇の上に金銭を置て打返しゝ女童のなるゝ化ゝゝて觀しゝゝば政宗いや苦らも候ゝ化手に取ゝゝゝ言も終らぬに直江謙信の時より先陣の下知にて麾取候手に賤しゝ化物なゝゝば汚き候故扇に載て候ゝゝ政宗のかゝふ投戻しゝゝ兼續父も山城守なるゝゝ僧なりしが還俗にて武勇を事とするゝ

石田三成或雨夜のはなしに直江と近付私語なるハ卑賤より出ゝ天下を治るハ大丈夫の志なり我豊臣家の恩深しゝ大閤斯世におはしまさん中ハ思ひ立べきなれども終にハ旗を揚天下をゝゝ

やゝ存ぜり其時徳川家父子とバ如何して討亡ぶべき武畧と廻らしゝ
ゝんやゝ語ありしゝ直江此を幸ゝやありひゝん是こそ志を所に候へけれ
も徳川父子関八州を領して且蒲生氏郷ゝゝ勇将に親しゝあり輒
く勝べゝゝ先氏郷を滅し景勝に會津を賜ふゝんや然らば吾景勝
に謀ゝゝ旗を揚我先陣して師を出すべし其時西國の諸将ゝちとかゝ
らひ押寄て関東を討亡ぶべゝゝ相謀て終に氏郷を毒害し後
秀行八十万石の地を削ゝ會津を景勝に秀吉賜ふるハ此謀より事起
るゝいへり

直江兼續惺窩藤斂夫に對面せんゝいへるを聞入らるべ兼續れして行き
きバ不在ゝ度々招けゝゝ行ぎゝに今日来ゝるあも逢ば偽て他に出さ
るゝや思ひんゝゝ直江が許に行きしゝふ直江其日関東に赴きしゝらば跡と

追て大津に至て對面ありて直江廢をうる家と急に取立る時人臣の心得
いかゝゝ問惺窩事を速にせんとせば却て敗る基なるぞ答へる後に直
江景勝に勧めて旗を揚させ必家を滅べしと惺窩ゝゝれしゝが果し
て景勝に事を起させゝるが其功なりがたき

慶長三年八月十八日太閤逝去其比台徳院殿伏見ふおハしまして太閤
の病重ゝりしゝば関東に赴らせるゝん事延引なりしゝが俄に十九日
伏見を發しして関東に歸らせるゝふ是東照宮遠大の神慮なるぞし
四老奉行内々相計て徳川殿伏見ふ在て權威日々に増長なべし秀頼
公と早ゝ大坂へ移しし諸方一同に參集りゝ尊敬なべ事然べしゝ東
照宮に強て申て同四年正月十日大坂に移居ありり東照宮も送らせるひて
大坂へ御出あり片桐東市正且元が宅に御止宿ありるが十二日の内

けげの上俄に打立のひて淀川を御船にて上らせのふ處に牧方近く川岸に人多く群集り若や謀奉る謀叛の輩にあるべきやと驚く處に井伊直政ゲ足輕〻見申者あり程なく御船近く成ければ五右衛門ならびに物頭跪きて待奉り〻頓て伏見に入らせらひぬ

又此時御乘物に八村越與三右衛門を乘させらひ東照宮に八倍者れ騎馬の中に御まぶと有〻〻も〻り又井伊直政八馬上に〻〻御迎に出物具〻て其上に常の衣服著〻〻直政ゲ手の者皆下に具足を著弓鉄砲れ者彼是二千計〻〻〻參殊に御愛あり〻る弥八鹿毛を引来り〻〻其儘打乘せらひ〻〻歸らせのふ〻も〻り

此頃既に世間さわぐ〻〻言ふ〻〻いふる事ゝ出来らんと人々あやぶ〻〻もへり東照宮も御屋敷に大竹に〻〻菱垣を結せ〻れ御門を押開き敵寄来ちバ堅固に防ぎ守らせのふべき設あり〻御門を開く事然るべ〻〻ぜと申者あり〻るバ門を閉て守らバ敵に侮らるゝ〻り只押きて軍の支度をせよ〻〻仰有〻るゝぞ京極高次參り〻〻大津の城へ引移らせ〻〻きんやと勸め申されるを聞召敵寄バ上の臺へ押上げ金札の宮れ邊ゆ〻〻真丸に成〻〻合戰まべ〻〻吾兵二千計やあん敵何萬るあるを打破る事ゆ〻〻〻〻仰らきり正月十九日安國寺瓊長老生駒雅樂頭中村式部少輔堀尾帶刀四人四老五奉行の使〻〻〻て東照宮に參り〻〻伊達政宗福島正則蜂須賀至鎮縁組の事に〻て徳川家獨擅なる事ゝも豊臣家の為然るべ〻〻ざる由申旨あり依て世の中愈さわ〻〻なる風説あり其頃榊原式部大輔康政伏見に上り〻て

二月廿五日尾州宮に著るゲ伏見の騒〻〻き由を聞日夜道を急ぎ

〻道をぐ〻まけバ伏見にて既に東照宮の御館へ敵押寄〻りたぐ〻
いひふ〻も廿六日の晩膳所より伏見よりの飛脚に行逢ひぐ〻弓箭ハ始め
り申さぬ〻を聞康政悦んで則膳所に陣し秀頼の下知と称し伏
見の驛に付東海東山兩道の人留まる〻ふもさせ勢田矢橋と三日押留
〻り其比の騒しき諸國より聞傳へ京伏見ハ集る人殊外多かり
ハ押留らも草津野洲を始め〻て何万と云ふ数計るべ〻ども佛康政
三日の後未刻に構へ〻る関所をひ〻らせられバ旅人一同に京伏見に入
る康政膳所を立〻て七千計の人を率ゐ〻伏見へ入るもバ京〻〻関
東より数万の軍兵馳着〻〻いひふ〻も康政小具足着て鉢巻し
馬ぞるし押立て參られバ柳前に召て御手づ〻御のしを下きも
る康政下知して御蔵より料足数千貫出させ人々に分渡し内府

の軍兵六万〻〻かけ著〻もバ館ハ〻兵粮の用意俄に設けるる〻〻
いひふ〻せ〻店屋物を買来らしむ数千人京伏見淀ハ馳廻り〻赤飯菓
子酒やうの物一つも残らず買来もバ関東より十万の軍兵集ア〻〻
人々思ふぬ者もなし是に依〻石田が謀空しくたるもいひ東照宮
柳生又右門ハ石田が士大将島左近に同國のよしを〻〻懇たりと聞召
き左近方へ行〻物語して彼ハいろいろふらん聞て来もと仰有しば
柳生左近に逢て世間の物がたりして成べき事なるんといひもバ
左近聞て今松永明智二人の智謀決断ある人なりもバ何事か有べきと
打笑ひて此子細ハ或時石田密謀に及びもるに左近豊臣家の為と存ぜ
んハ斯あ〻で止べきやされども爰に存る旨あり大事を企るハ我
志を處と無二無三に決断して少も猶豫有べ〻ども去年より

度々仕課べき圖を空しくなづしまふ事多し既に時を失ひぬ能々世のあらさまを見るに石田の家を惡む人々大なる徳川殿に心を寄せ當家の存亡計るべくもなく一日の過るも殘多し只理を非にすげなく唯今まぐ疎遠の諸大將達へも屬りくどくも遺恨なく計ひて交て親しみ志なく時を待べきもの計策にてそなひ者共三成さまバ縱令一時に能志を遂るとも後の安うべき樣と計るなりとひそかに左近いやく事能く一時に勝を得るあらバ後に何の危き事ゝ候べき内府に親しき人々と積るに其兵二万に過べうも味方素より心を合る大國の人々又近國の兵を集るとも忽馳寄て五六万ハ及ぶべし景勝卿再拜を取て下知し關東を攻破らんに何程の事ゝ候べきとて又存る旨をいひ出しなるに客のきて三成坐を立なまバ樫原彦右衛門居殘て

て左近に向ひいなるよも仰さる事なり松永彈正明智光秀ハ無雙の惡逆の者なれど事を決斷するハ誰か相並ぶべき此詮議の破り相手に頼ぶべきものをといひなるにや其よりうかく柳生に答へなるとなり

石田三成を始め相組る人々加賀利家を推尊まつて東照宮を傾け奉らんと日夜相謀まつり利家の長子利長細川越中守忠興を招きて累年親しくしる間薄うらぶさぞ危ふらんと扶らんやと問るに二代の知音にて候へバ聊慮畧候まじと答へらる利長尤斯こそ有べなれ頃日石田三成小西等相計つゝ内府の向島に館を攻囲んと議決しぬ潛に知らせ候ぞと語らましかバ忠興熟々と聞て日比の親しく斯る大事を告知らせ候事淺からぬ事なり心得候ひぬ明日參り

く申合候ハんとて歸られるゞ
是ハこれより前東照宮ハ藤森ゝおくゝ小井伊直政ゞ士木俣土
佐ゝ風ゝ來ゝて御館の隣なる宅ゝ火をかけあんハ危き事なり
と申なきを東照宮御寢所へ土佐と召て具ゝ聞ゝ召き其翌日向島
ゝうゝせのひなを
直ゝ向島へ參て東照宮御對面有ゝゞ忠興近習の人と屏けて只今參
る事別の子細も候ハで石田等黨と結び利家ゝ依頼ゝて君を亡ゝ
申べきと企候利長と年頃の親ゝゝよりて具ゝ洩兼ゝ彼等ゞ謀
ゝ落ざる御設こそ然るべく候へと申さるゝと聞ゝ召過ゝゝ年信長
摂州出陣の比弱年ゝて武勇の譽を有ゝ故申通ぜゝなり斯る深
志ありとも知ざりなる悔ゝさよと悅ぜのひゝ榊原康政と呂て

いなゞ有べきゝ仰有事急ゝ候後きてハ人ゝ制せゝるべゝと申處ゝ忠
興國の事をけハ人の與なる事最一ゝ候へバ浅野幸長と召き候へ彼ハ
必徳川家ゝ心を寄べゝ也と申さるれバ頓て使を走らせらるゝゝ取あ
つで參られゝを忠興出向ひゝ事の子細を語らるゝゝ人多き中ゝ
かゝる事を知せゝるゝ事交のかひ有かゝる時ハ疑の生ゞ易く習ひゝ候
ゝて忠興幸長先誓紙を書て奉りぬ若敵寄せバ幸長ハ宇治川を
固め候ひるん忠興ハ敵の中ゝ打交ゞ不意ゝ軍仕候べゝゝそ相計ら
まなるさまなれども是も始終勝を全うせんき道ゝゝあらずゝ利家と和平有
ゝ踰る事候まゞ只兩人ゝ任させのひ候へゝゝ其翌日忠興夙ゝ利長
の許ゝ行向ひゝ昨日の密謀一々内府ゝ告ゝゝそ語らるゝ利
長色を變ゝてこハそも戯ゝ候やゝ實ゝ候やゝ驚きなり忠興きれぞ

愚者も千慮の一得候此事を思慮ふ石田謀て兩雄を鬬ハしめ其弊に乗んと料るものゝ候兩雄相鬬ひて亡びゝバ安藝の輝元備前の秀家などを大将として吾等が如き者ハ手ゝ攻平けゝん所存見顕し候寛仁の内府に與してこそ家をも起さゝ三成と心を合せて名を汚し身を失ふんハ必定にて候かゝ申詞を許容候ひゝば内府と令親利家と和睦有て世穏ゝゝん事こそ然るべく候へ是全く前田家と佑る所にて候と詞を盡して規誨せゝ申しゝバ利長も深く思慮して道理に當る事どもにて候さゝバ父に申さバやとて利家に斯と告て利害を詳に語らゝるに利家も諾せゝれゝゝ

又一説に五老五奉行の内爭論不和の事あらバ生駒雅樂頭親正中村式部少輔一氏堀尾帶刀吉晴三人和平を取謀ふゝも無て太閤の遺言に因て井伊直政に就て和平の事をゝらまゝゝゝ

常山紀談卷之十一終

常山紀談卷之十二目次

一東照宮細川家の難を救ひ給ひし事
一七人の大將石田を討んとせし事
一東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立せらるゝ事
一東照宮花房助兵衛を起請文を書て仰られし事
一下野國小山にて上杉入道議論の事
一渡邊總左衛門野中市左衛門忍て大坂を使する事
一上杉景勝會津表手配の事
一東照宮小山の途中にて竹を伐せられし事
一伊達政宗膽氣相馬の城下に宿せられし事
一竹村半兵衛田中長胤を押止る事

一岐阜城攻の事
一森寺四郎兵衛飯沼小勘平と討つ事
一南部越後母衣串とぬらざりし事
一兼松又四郎一柳の陣見切の事　附兼松武功言上の事
一山田多門兵衛幼年功名の事

常山紀談巻之十二

備前國　湯浅新兵衛元禎輯録

○

関白秀次生害の後細川忠興の家に罪蒙るべき事起きり其子細ハ秀次當時の大名財用乏しく記に潛ひ金銀を貸しふ事あり是ハ人に心とさんゲ為且ハ財を利せんが為あり忠興も黄金二百枚とかりくるべバ彼家金銀出納の事を司どれる人急ぎ彼金返しふべし券契と破て捨候べし左ふらんには太閤の奉行に券契を出に成しに申る忠興いろいろ叶ふべくに此事太閤に泄聞えあバ罪科に處られん事疑ひなしつゝすべきと案ド煩ひ長臣相集て議しくるに松井佐渡守申るハ某年頃徳川殿の御内なる本多佐渡守正信と親く相語らひ候彼に付て徳川殿を頼み参らせん徳川殿も

さる賴母一さ人ゆゑ〳〵せばいつゝで是程の事ゆゑ人の家亡んと
まるゝと見捨ゝる事ハ候まじゝと申に忠興我日比内府と親しくもなし
斯る事賴むゝ便なゝ一ちゝぐも汝正信と親しかゝんゝハ試ゝ計ゝ見
よゝゝふ松井木多ゝ志ちぐの事有りゝふ德川殿聞し召し其儘松井
と召き人とのけゝ尋問せらひ正信として唐櫃二ツ開らせらるゝ一ツゝ黄
金百枚づゝと入らるゝゝり其黄金の箱ゝ題せし年月を見ゝゝ仰有り
正信是と考るふ世一年の前未三河ふ御座有し時ゝ候ゝ申に德川
殿松井ゝ向ませらひ凡金銀ハ出納の司ゝる事ゝて若人知まじ用んと
する時ふ吾心ゝ任せ難し内ゝバ此黄金を貯る事斯る事を待ゝ年久
し今其家の為ゝ吾年比の志建しるゝて嬉しるゝゝ自ら是を松
井ゝ賜ふ松井大ふ悦びかゝる有かゝに御事ゝて候ハゝ既ゝ亡んゝ

る家の斯再び継べゝ候事偏ゝ君の御恩ゝり細川ゝ家の候ゝん限
ハゝゝで此情を忘奉るべき速ゝ本國ゝ申下して黄金めし上せ償ひ
奉るべきゝゝ候ゝ申に東照宮聞し召ゝやゝ此事世ゝ泄聞え
ゝんゝハ兩家の禍ゝてあれ夫故ふ斯人知まじ用ふべき料の物取
出しゝゝゆめゝ償ん事然るべゝでゝと仰せらるゝ一ゝバ松井殊更ゝ悦
び急ぎ歸て此由を申候ゝんゝゝ御前を立て出ゝゝり遥經て忠興
其事をゝゝ御館ゝ參り御對面の序ゝ正信を呼出し東照宮ゝ向
て申ゝりゝハ年頃忠興ゝ家人ゝ仰下さるゝ事謹て義ゝ候何事の忠
ハしゝべきゝハ候ゝゝども若御家ふ事有ん時ハ必君の御為國
も身をも捨ゝ此度の御情ゝ報ゝ奉らんぎるゝゝ候さりふゝ
ら忠興常ゝ伺公仕て候ゝんゝハ本意遂ん事叶ふべゝで是ゝり又

素の如く疎々しくこそ候べけれ御暇申て出ぬさきハ年頃忠興東照宮と親しうして利長を諫争せ給ひ故に利家も一向我家の事思ふ方なく心得て忠興の申旨に従ハ給ひ

○慶長四年大坂に在つる諸将の中福島正則浅野幸長黒田長政已下七人石田と不和なりし人々使を以て朝鮮に在りし時各力を盡し軍せしに目付に定られし福原右馬助直高垣見和泉守家純熊谷内藏允直陳太田飛弾守政信等私曲を構へ太閤に達せざりし事どもを憤りて罪科に處せらるべき由申やらるし事起りて争論甚しく使度々に及べり七人の諸将此事を止べきや石田を討立しも必所存を遂べしの趣を石田聞て上杉景勝に如何もべきと問上杉も案ド煩ひしに佐竹義宣日頃三成に親しうして是を聞て伏見より大坂に赴き三成に許に到て別に存る旨もなく只徳川殿に告て和平の事を頼むべき外謀有べうもなく三千計の兵を以て三成を伴ひ伏見に趣きなばハ諸将事を延しうる故石田を逃しつるとなく既に追うけんとせしに早伏見に著給ん聞えしうば歯をかみてさく止なり東照宮聞召太閤在世の時を寵と頼まして權威に誇り無礼ふるまひぬべし今に當りて諸将の申さる處其理なきにあらざれども罪の疑しきハ軽くもとらや聞ぬて強てなぐめ給ひ給れども尚止むべうざきハ今世治まらう弓箭を起さんとやカ多き事どもなり我石田と心を合せ諸将と軍もを重しと仰らるるにより止事を得ずして怒を押へて暫く止ぬ其後今世の亂なるべき也又穏うるん事を一己の所存にあるべし

暫く佐和山に退て公の万事に相たゞさるる事多くて然るべうん子息隼人正の事ハ我〻家を全うせん事を計るべしと三成に仰らるゝ由謝して佐和山に帰るべきや否景勝に相計るべしうば景勝我會津に帰て上らゞハ内府催促有ん其時侮るゝ体を顕して罵るゝどもゝ必軍を出さゝべし行がうふさやうに打破らるゝんや固く支て戦ん其間に大坂に討て出く素より心を合する諸将を集め旗を揚らるゝに是に過るゝ謀有べしとも覺えぬと計らるゝしうば三成佐和山に赴くるゝを定めらる三成が士大将島左近昌仲三成に勧めらるゝも秀家秀詮も両端を持るゝや覺束なく候佐和山の軍兵と計らるゝに一戦と決まるゝに不足候まゝ一千餘を止めゝ佐和山を守らせ蒲生備中舞兵庫高野越中と其各二千の兵を率て風上より火をうけ所々を焼とるゝて攻るるるゝどもゝ内府拒ぎうゝて引退れん處を追詰々々軍せは争ゝ打漏すべき方に一ツも志を遂ざるるゝば潔く御腹召れ候へ空しく佐和山に退きゝば後悔するゝも益あるゝ居るゝ圖と外さん事口惜く候といひけるゝども三成ハ景勝と相策りし故昌仲が謀略を納ぜずして止ぬ

三成既に佐和山に趣くに及んで七人の大将猶憤深らるるるゝ道に候へ計取べしと言ふるゝす東照宮聞しめ召今ハ打捨置ぎや如何とべきと本多正信を召て仰あるる正信つゝく思慮して今日本を取て徳川家に献ずる者ハ石田に過ぎぬ候へ其故ハ三成新曲ある由を人々悪て候へども又三成に與する者も多く容易く打亡し難し故に言を礼儀に託し手を徳川家にかりて亡さゞやと存る人々

候へバ三成今亡て後悉く平均に帰せんや諸将外に八殿を敬にとゝ
ゝも内に八隙と伺ふ人も候ちん故太閤の恩を得たる豪雄秀頼ハ
背くに忍びず三成と憎むの心の移りて殿ハ懐き中すべし三成ハ
ハ殿を敬し重んぜん事愈厚うあべし三成久しく人の下ハかゝむべき
者に候ちゝハ頓て弓箭を取べ況事掌の中に有三成敵とするハ足ん
や其時三成ハ打勝ちたらば殿自然に勢ひを得させもひて誰か靡き
従ふで候べき日本三分の二ハ殿に帰服ちく候只三成に御心を付
らるゝ〳〵彼を立置れ候こそあるべけれと申ゝるを聞召入ら
れて三成ハ旅程心許なしとて結城秀康卿をもて送らせもひけり
東照宮景勝を征伐に関東へ向ちせもふ時江州水口ハ御泊りあり
其明の朝長束大蔵大輔御膳を奉るべきゝ申て御約束ありしハ

夜四ツ頃俄に水口と打出ちせもふ御輿をかく者出合ざりけるに渡邊
忠右衛門守綱草鞋脚半かけて御輿のうしろ〳〵とかゝれるを誰ぞと
仰られしハ渡邊忠右衛門にて候と申を聞召何とてかく不意ハ
打出ると知らぬぞと御尋有るとハ若年の時より御傍に仕へ奉り
候身の是ほどの事を仕まゝく候や情なる御詞なりとぞ申る忠
右衛門宵よりかくなんとおしてちりて御輿のうちを枕にして臥
居たりるとうや其夜土山に著せうひて翌日水口へハ昨夜時をと
りとゞめて早く立候ひるとと仰遣されけり
東照宮景勝征伐の御時小山にて石田兵を西國に起せる告を聞し
召前に八景勝が勇将なる西國八皆敵なりと人々驚きとり
しハ花房助兵衛職之と召て汝ハ近年佐竹が許に在て義宣が心ハ

よく知らんめるる乱に二心有て軍を出しつゝ帰る道をや塞ぐべき又義宣謀反の志あるまじくとなくバ起請文を書て我に見せよと仰られしふ花房義孝義宣ハきもめて信のあつき人に候へと別の子細ハ候まじ只人心の反覆ハ父子ゝ間も計りがたき事に候起請文ハ御ゆるされと蒙るべしゝと申れ東照宮助兵衛ハ浮田が家の長臣と聞よりしに器量の小き男にて大息つゝせもふ花房かくと後に傳へ聞られ起請文と書なるバ佐竹二心ありとて軍兵の疑を散ぜん為の仰なりしふ察せずして起請文を書ざりるこそ口惜られたゝひ義宣軍を出しゝとも我何の罪ありるべきと深く悔みるるゝぞ

景勝と征伐せらるゝ時七月廿四日東照宮下野の小山に御著陣あり

○

りるる處に其日伏見より石田三成佐和山を出て大坂に至り諸大名と相謀て亂を起せの旨告奉る則先陣の諸大名諸将を召れ東條法印津田小平太本多中務大輔并伊兵部少輔を以て今度三成兵をあぐる間定て妻子ゝを悉く押籠べし心中の難義察せられぬ且豊臣家の恩を企る旨申らるゝせバ秀吉の恩を請る人々多られバ悉く大坂にむもむき妻子ゝかゝ付又ハ三成に心を寄られんも必も遺恨にあるべく仰出されるり皆疑惑や有るんとろくの詞なるりるに上杉義春入道入菴末席にありしが進み出福島正則加藤嘉明黒田長政に向ひ各思慮に及ぶべるべ人おちと三成に出し置只今御味方申て其質を棄バ妻子の恨世に誹ものるべるべ秀頼公へ出し置るる人おちを三成横取にするるられバ三成と一戦に及ぶ

妻子の恨世に誹も有べきに人ハともあれ我ハ先御手と引討死と遂べしと申されれバ皆一同に御味方仕るべしと決定しぬ其座に是わゞの事辨へざる人はなきにつゞざるも素より なれども時にあらて義春の片言拔群に聞えたるとぞ

又一說に一座ゆゑさくと申さるる處に福島正則何とか石田方役ひて弓箭とゝんや秀頼公に疎遠ゝおもしまさんハ神明に誓ひ〳〵正則御味方たゝん事勿論なりといへれ故皆一決しぬ

入養ハ上杉弥五郎とて越後上條の城主後民部少輔とゝひて景勝の姉婿なり

義春ハ能登の畠山義則の弟なるを五歳の時より謙信もてひ置れて上杉定實に養子とせられしなり

謙信の先陣の大将にて武名世に高し景勝新發田因幡守治長謀反を討て新發田の城下におしつめらるゝ時治長切て出景勝の先陣を放生橋まで追崩し景勝の旗本へ押かゝる此時義春景勝の旗本の先に在しが日比丸の旗を取て三十間計先へおし出し手廻りの士どもをかり敷せ搶衾を作りて待うけゝる故治長引退くを追討にもとる勇将なり大坂冬陣に二條の御城御書院に諸大名出仕の時東照宮入養を召上杉家の武者ぶりの事ども御尋ありて入養詳に答へ奉るを聞しに召上杉家に軍法素より聞及びたる事ども深く感ぜ入ぬと仰あり諸大名列座の真中に入養小男なるゞ言語分明に其次第誠に懸河のごとくなれバ諸将何れも武功智謀の人々なれど詞を出れも

のかゝ深く感じ入る色なりとや

同じ時國清公（参議押政朝臣の事）小山より大坂の北の方より誰か使をべきとて慶長五年七月廿四日長臣を召て其姓名を書て出せと仰らる各奉りぬとて其明る朝書付く出れば渡邊總左衛門ぞ来る公も左の袖より出させ給ふ同じく渡邊を記させ給へりいかゞ患難なり堪て事能使きべき人なりと人々思へる故なりさゝバ渡邊を召て此旨を仰らるゝ此八大事の御使なれば辞申れ衆議一決しなる上八とかくの論に及バざるとの仰を蒙りさて八今一入添られ候へ人八病と申事も候へバと申られバ野中市左衛門を相副らる書二通を渡させ給ひて仰を蒙りて程なく東西の戦あるべきに大坂に赴く事こゝろにもらぬ色の見えられバ公よりやがて関所を通り得

ト若殺されなゝバ吾馬の前にて討死しなゝと思ふべしなどゝ仰せられ大坂の屋敷に到らバ今度の一番首取なるべしなる詞小より二人下人を召具せられ七月廿五日小山を出て其比三河の吉田公の領地なるに己が宿所へも立よらで笠をかたぶけて忍びて打過ぎ尾州熱田に到れバ船着に大竹の虎落を引て守りなる神職の大原左衛門太夫八渡邊ぞ知れるとゝみ有て潜に立なるに爰にて太夫が下人竹をかゝげなる一把をくゝり付て七八町計先達て此をなるしに案内者として伊勢の堺に行て夫より野も山も皆敵の中を忍び通れバ飯と乞べきやうもなく米をかゝく関の地蔵に行着ぬ行あふ人ごとにあやしゝなれ関所にて殺されんよく心得られよと口々に云関此有様傳へきくにならく通るべきやうハ思ひもよらで伊賀越にやかゝる

べき浅間越しや行べきと二人打かたらひて先伊勢の大神宮の祝上部左近が許へ行て宿を借んと立よりれば今何方より参り詣る人のあるべきとて取あへず左近立出て一宿の事ハさて置ぬと出へ棒をそたき出せと罵りなれ二人ふくきき奴かなふまじく池田家の恩を請しる身を怒れどもせんなきなく空しく立出る時左近追つゝ何國の人ぞと問池田三左衛門尉が士なりと答ふ左近ハそこの川堤れ下へ乞食のすてゝるむしろとかりて待れよと小聲へ二人さる様もあらんとそいひつる詞の如くなりり夜へ入て左近来晝の乞食ハ何國へあるといふを聞てこゝにとゞまりどいふさてひそうへ相約して左近が家の裏の戸口より内へ入奥の一間へ忍バし疲をやすめゝり左近今の時家へある下人も打ちくべきよあるゝれバ晝のちくたのゝしげなき事を申さるゝとてつゝき飯をもてこめ出し夫婦給仕をもてなすさて道の事を問へ浅間越ハ人の往来まれなれバ此頃ハ女乞食をも殺し候中々通りがたかるべし只一命をかけ物へして伊賀越を通られ候へとゝ人バさゝバとて荷ざうをおひ敵をうづれへ身をやつし御殺箱を笠うけ刀をも左近が許へおきいと見ぐるしき小脇ざしを求出して指へをりかくて曉へ宮川を打渡り関所近くなりて見れバ通るべきやうぞなきやがて一封の書をバ深田の中へ深くかくし理し其日ハ行暮て山にふしあくる朝一通の書をとりふして青草をとりて一二三の印をし笠の緒として一の関所へ行つる固めるる士どもかゝる大乱へ伊勢へ詣る者やあるとて打殺せとひしめきなり二人ハさるぐとくより伊勢へ詣て此さるぐへ及び一夜の宿をもか

まべうしんとの法令よりつづくことなるべきやうもなく進退きはまりて候大坂の妻子も心元なく天照大神をたのゝまつりて歸り候ぞとたぐりくさゝバゝ荷ざゝ御紋箱脇ざしの鞘を打くぶき髪をとゝせ帶袷ゝぢまでゝ改見てあやしき事もなきよりて通しゝれバ夫より次の関所でも事ゆゑなく打過ぐ大和の奈良ゝ出ゝ寺ゝ入酒を求て飲ゝうゝゝ住持の僧さゝゝ參ゝ毛ゝゝて別ゝゝ紀酒を出しゝ又薄茶をも出しゝゝきバ悦んで二人腰ようけゝる銭をあゝふゝゝ小僧多しゝて請取ぞ其時住持の僧ゝ曰誠もたぐうゝ爰までおづしゝれなゝ爰まで忍び来る人も候べど皆関所ゝて殺されゝ候よくたぐうゝ故ある人とおぼえゝうゝと語れバ二人心の中ゝ打驚きゝれゝゝ伊勢ゝ參りゝる物語しゝて天照大神ゝ助られて無事ゝ下向ゝるゝてゝ候へ此より後もわくあゝんと氣づゝハしゝくゝ候ゝゝと答ふ僧ゝゝゝゝを聞て是を信ぜずさゝんゝハ別の事も候まゝ関所ゝ事故なく通られゝんゝハ朋友ゝちゝ奈良ゝ出家ハ見つけゝるゝの哉とかゝれゝゝゝ二人見お

られしゝと打笑ひ出て行奈良と大坂との間ゝ関所あり何者ぞと咎めゝれバ又前乃ごとくゝ伊勢ゝ參ゝゝ歸路ゝ候とゝバさゝバとゝゝ改めゝあやしゝ紀事もなきゝ通さバやとゝゝ所ゝ番の坐上ゝあゝる老人物ふいゝゝゝて是非と論ぜゝゝ及バゝ斬て捨ゝと下知しゝゝ末座ゝゝん真の參宮の者ゝゝ見え候を斬て棄バ神の祟も恐ありと再三ゝひしゝゝらバ二人危き所をのがれて大坂ゝ行着ゝゝ東國方の諸將ゝ屋敷ゝハ虎落白ひきハしゝ大坂の兵士門々ゝ警固しゝて内外の出入も絶ゝれバ兼

て知る材木の商家に行て大根を買ひもしや聲を聞知るとて打廻り
〳〵大根を賣る真似しなり久保田市大夫窓より見くいるに渡邊に似
る人もあるかなとひら〳〵大根と一聲よべハ渡邊久保田が窓の下に行
笠ととり大根をさし出ぬうちに宿をとへバ忙しくなりと答へ材木
屋がゝりを歸るる野中に斯と告て悦びおへて治原勘解由北北方
に属て有るに又保田かくとゝへバ門を守る大坂の士にこそて新
と荷ふ人夫三十五人と出し其中一人を殘し〳〵渡邊と其かゝりと
新を荷ひて門を通る時警固の士此男ハ今朝出る者にあらぬと捫
留し〳〵久〳〵煩ひく打臥居るが快くて今日出る人大なりと
いくども更に聞入ぬ勘解由立出くさまぐにいひ断り通り得て北の
方に前に參りぬの仰とこまぐと述し笠の緒ときて奉る北の

方ハ簾を隔て對面ありて其後渡邊に禄まゝあるべき賞せらるゝ事大
方なるべ誠に危き所を遁れ得る事どもなり

○東照宮會津を伐せなるゝ時景勝ハ謙信の影堂の前にて諸將士卒に
二心有まじきこのき請文を書せ妻子をハ會津にさゝり燒草を積置
り敵寄來らば逆よせんとて所々の地形をもとめ白川に安田上
総介を先陣として嶋津下々さるを二陣とし景勝ハ只一騎背炙に
嶺に登り樵夫とあるいて山中を通り白川の境の明神に出兵
をうかゝ不意に討てくるべき道を計らるに上杉方にも此とゝ
まゝて寄手ハ露もしらぬ東照宮の先陣太田原に陣して白川より一日
の行程なり景勝大に悦て其勢八千を率ひ長沼に陣し寄手白川
に攻入ん時山中の間路より思ひもよらぬ後にまわり東照宮の御旗

本より切て入り萬死一生の軍せんと謀らるゝに石田兵を起すのよ聞えて東照宮宇都の小山より引返させ給ひけり

會津征伐の御時東照宮下野小山の途中にて左右の近習の人々に向ひ給ひ我麾を忘れたりあるか小竹林に串にするべき細竹を切きと仰せらるゝ則切て奉るとだゝり紙をとり出させ給ひ鞍の前輪におしあてゝ切裂てくゝり付二つ三つ打給ひ景勝を打破らんまゝ是にて事足ぬとのたまへり實に麾をこゝにとゞめ給ふ

上杉家は父より已來武勇の家にて景勝驍將なれば人々ちやうもこゝろなる故景勝を侮らせたまふの機を示させ給ひしにや然る處に西國中國一同に御敵ありといひふらし小山より引返させ給ふ時又彼竹林を過させ給ふに上方を攻破るゝは此麾も無用の物

○

なりとて棄給ひけり前後に大敵ありとえ人々愈疑ひ惑ふ故に猶々恐るゝに足ざるの機を示しふるべし

同じ時伊達左京太夫政宗は急ぎ本國に歸りて手より攻入べきゝ仰を奉り大坂を打立夜を日につぎて馳下る白川より白石まで皆うゝきの中なれば道ふきぶりは常陸國を廻りて岩城相馬に きゝつゝく國に帰らんとて相馬は累代の仇なり然るに政宗僅に五十騎ばかり引具して常州を經岩城と相馬の境に到り先相馬が許に使をたてゝ此度德川殿上杉を征伐しまゝより政宗に手より向ふべきまゝの仰を承る路既に塞りぬ此地に馳着はあまりに道をうちし疲れ願くは城下に旅館をとゝのへよや馬の足休めて明日國に帰り入らんと存ぜし

いそぎ相馬長門守義胤こゝを聞あるを運のつきる事そうさう
なりとて伊達ハ相馬ゝ年比のうききるうまゝにて味方討ん一方の大將
承りとゝいふものとゝ今宵一夜打して案内あるべし奴原を一人
も残らず討取て年比の仇を報い又今度賞ゝも預らんやとて民
家をあらゝ迎へ入る人々集て夜討の評定しけり爰に水谷
三郎兵衛といふ者ありの末座に候ひけるが進み出末座の異見恐
入てひかへども既に僉議の座に連りて所存を残まじきにあらず
抑窮鳥懐に入る時ハ猟者も殺さじとこそ申ひへ政宗ゝの大
將年來の恨をもつて君を頼ゝて來りをとゝりて中ゝと討
んと勇者の本意にあらず長き弓箭の瑕瑾なるべしや又彼が國境
駒ゝ峯ハ至らんに行程僅に三里ばかり日未さ未の時にさらば政宗

が國に入らんとゝ思ひ日夕なるに至るべしとゝ僅の勢
にて止る事深き慮なるべしや只此度ハよきに警固して國に返し
重ねて戦ひに臨む日勝敗を天運にまかせらるべきやと申けるハ一座
の人々此議に同じ兵粮秣に塩魚に至るまでつゝ置ものを焼て夜
廻りに義胤が士ども政宗あるべきかと体こそ心みくるに
いざ試んとて夜ふけて後馬二匹とりこの内人々走りちて以の外に
さゝぎのゝる政宗小童一人に燭をもて白き小袖を上に打かけ左の
手に刀を提て立出相馬殿の御人や候といふ是に候とて行向へば物
音高く候政宗が下人原狼籍候んまふよくあつめてなまり候へと
て又内に入りける夜明まゝに立もやらぬ已の時なりに成て義
胤のもとに使して一禮しさて急ぎて馬を打て行くひそかに人を付

て窺しむるこゝの國の境駒ヶ峯のあるさゝ伊達家の軍兵雲霞の如くみちくて出むくれらくて関ヶ原の事終りて相馬もそゝ上杉ゝこて
ろ合せゝもゝ亡ぶべきゝ極る政宗訴へ申さゝ〜ゝ相馬ゝ年比政宗がかきゝ石田上杉ゝ與〜ゝ一定るんゝ政宗彼ヶ為ゝ討ゝ〜然るゝ
君の仰奉りて馳下るゝを聞て深き恨をゝもゝ新恩を施しき彼ヶ逆謀ゝ非るの證ゝいつゝや又累代の弓箭の家永く断ん事不便の
至ゝと度々ゝ申さゝ〜ゝ後ゝゝ本領を相馬ゝ賜りけゝぞ聞え〜

関ヶ原の時三河岡崎の田中兵部大輔吉政の子民部少輔長胤ハ父大阪方ゝ同心〜ゝりゝゝを聞て宇都の小山を忍び出居城岡崎ゝ帰りけるを國清公聞〜召竹村半兵衛を召ゝ吾吉田ゝ帰る頃まぐ

民部を牛窪ゝあさくとゝり置けと仰らる竹村是ハ安き事ゝハ候へとも〜ゝさき計ひて見候ん〜て道ゝ出迎ひ鉄砲の者を百姓の家ゝかく〜置具ゝ支度を言ゝゝる其身ハ山のせゝゝゝ出て待つ所ゝ長胤來り竹村池田三左衛門尉ひそゝゝゝ申せと申事の候て是ゝ出候と〜ゝ長胤馬廻りの人を遠ざけらゝ〜ゝ竹村静ゝ歩ゝより別の子細も候へとも苗申せと三左衛門下知〜ゝるゝゝと云もあるを左の手ゝて長胤をひ〜ゝとゝく一尺計の脇ざ〜を抽て長胤ゝ打〜當た
り従者ども〜ゝ口を〜やと怒もせんゝゝる〜竹村詞をゝけ近く
ゝゝゝと言ゝ吾ハ殺さゝゝゝも民部殿をゝ刺貫き申さん唯ゝ〜留申の
ゝゝく別の事ハゝりゝと呼ゝける處ゝ百姓の家ゝ伏置ゝる鉄砲の者どもゝけ集り鉄砲を長胤ゝき〜當て竹村を討んとゝる〜ゝ忽

民部殿を打落し申さんと聲々に呼りけり長胤力なく竹村に従て百姓の家に入まぐれあり止て四方を堅く守りけりなく東照宮聞し召し父既に味方に成る上にはやらしなくと仰られしなれば長胤則出られけり後に公に遭て手あぶき有さまもなくせなをひけることいとしやと

○

岐阜の城を攻る軍評定の時國清公大手に向はんと仰られけるに福嶋左衛門大夫正則聞て吾こそ今度の先陣なるべきぞあらそはけるに井伊本多公に向ひて内府の御縁者なり譲らるべしと有けるに正則へ尾越より西美濃に入て大手に向ひ公へ河田の渡より寄せられに定られしに中有て正則搦手へ吾こそ向ひ候まゝ尾越へ城に遠く河田へ遠浅なれば馬にて渉り易らるべし大手に向ふも城を早く攻破らん為なれば只搦手よりよせんものと申されけるを井伊本多正則の領地なれば大手より船筏を以て渡されん事安からへ三左衛門尉へられし手より向るべき上は既に定つる上は今更らんも然るべきぞと申されしに正則さては吾敵地に入て相圖の煙をあげ後池田殿川を渡されとしらせて大手に向る頃は慶長五年八月廿一日のぎ霄ぐれに公へ漬洲を云ふ出河田のはたに陣して廿二日の曉に川涯に寄せるなり伊藤五郎右衛門と云ものは岐阜より津田藤二郎を始として新加納村に出して陣しをる味方の軍兵勇み進んで早川に打入んけるなり公馬を乗廻し今しばと下知せられけるを此時貝福右衛門時にはやりなと申されば公然らへと宜ひける詞の下に

りさらまく波に馬を打入二三間歩ませ鞭つぎてさらさら貝

に川水をたくさんに打ちくゝいたゞき高く吹出を宝螺の聲諸陣にひゞき
てゝる是より一同に打入て一騎も残らず向の岸に打上ら
須賀平四郎物見さゝぐ乗帰り敵の多少い芦原に隔りて見へ
おもひへども二三千にも過ひつゝ軍い味方の勝と申を子細いら
と問たまへば須賀敵の後陣續りを後に兵を伏べき地十町ばか
ゞ有どもいかゞ存ぜず遥に來りしば人馬の息切まそよ
きとりこゝろぐゝと申しもそなぬに伊木清兵衛忠次味方の旗え
前にくゝむき陣の色くゝうに敵い後に仰て人の面白くひ必定味
方の勝ゝといさゝけり
公味方の陣を整へよみうにまたれると下知ひけるゞこゝろ
ぐに吾おとゝゞと進ゆゝと三町ばかり公今い時こそよゝと腰に
挿る麾を取て一ゝふゝをなまくを一同にとゝと打てうり忽敵を撃
破らとけり八田太郎兵衛久次北る敵を追ゝる所に朱色の物具
着て紫のゝゝける武者一人息つぎ居ゝを見て馳よゝうの武
者いゝちどちゝるゞひとと折しく八田馬より飛下り槍を合せ遂に討
取ゝうり是前田半左衛門ゝり
半左衛門い德善院の從子にて岐阜中納言秀信の近習の臣ゝり
打見ゝる處いまぐまそ温柔にて常ゞよく論にゝ人なる人ゝり
ゞ人々男子にゝうゝと笑ひにゝ此日の軍に敗軍の中に武市忠
左衛門と二人ゝゝまり引立ゝる味方をそげまゝつゞけと
呼ゝうて目を驚をゝゝきしそ武市も討死を日比前田を悔ゝと
る者ゝるけい前田に及ぶべきやうもゝゝとゝくり八田ハ父を弥三右

衛門正久と云士大将なり太郎兵衛今年十八歳父の陣代なり前田を討取なり〻〻従者柏原坐右衛門尾関弥五左衛門なみ來りて八田を馬に乗て帰る八田後に人に語りて云く〻〻年若血氣なるきに付て敵一人討取てきのみ疲るべきに付なり〻〻其時なをけ來る敵あり小児なれども生捕とせるべ〻死生の間に立て敵を討得て却て勇氣のおとろへる故なり〻〻とぞ語りける慶長六年禄二千石を増與へらるを同八年公参議に任じ参内の時久次太刀の役なり従五位下に叙し丹後守と称を後豊後守と改む前田利長久次が武名を聞一万石にて招きなりけるとなり

福嶋正則へ大手の惣大将なり素より他人に超られじと思なり〻公既に新加納にて敵を撃破りなり〻〻聞怒りもなく〻〻廿三日の朝先陣なり〻〻攻寄なり池田家の軍兵朝日口より攻入りけるを惣がへの土手の上なり見て人の功名を嫉み道全と云る法師武者に下知して町口に火を懸させ搦手の軍兵煙に紛れて進み得ず公是を御覧じてなる心得ぬ事なり〻〻火のきゆるを待べきなりやとて乗木畑をめぐり長良川より後の水の手に廻りて池田吉左衛門を公此城に攻せ〻〻時水門に居て案内はよく知つ水ぬきの有けるより入て水門を打破り旗を差あげ池田三左衛門尉本城の一番のりと呼りけり正則の道を妨らるゝ却て池田家の幸なりと後に人〻なり東照宮御書を賜り敵軍川を隔て相支る所に輙く打破り岐阜を攻落さるゝ功名賞なるゝ詞なりとぞ書せられける

岐阜中納言の士飯沼小勘平といふ四天王と世にいはれし剛の者なり新加納の軍破れ時小き堤を前にして居たりしに池田家の士大将森寺政右衛門忠勝が第四郎兵衛長勝飯沼を目がけ一間ばかりなる溝を馬に声をかけて飛せ来り飯沼が左右より鉄砲を打懸けるに甲冑にあたりて其身へ手も負ざる競ひなりしが敵へ多勢づくとや思ひけん飯沼が者どもなりしに森寺馬を乗寄せ飯沼名乗れと詞をかけて池田が内の森寺四郎兵衛と名乗る飯沼池田が内の森寺なるぞいざとて刀を抽て森寺が馬より下んとする處を右の膝口を切られしに森寺左の方へ飛下り馬を隔て切合なるが又左の腕に疵を蒙り今は叶はじと思ひて白刃を握り掌をくるまるるに無手と組飯沼を切透さんと刺通せしが疲れたる首を取りて人に奪はるるを従者久兵衛といふ者走り来り近づく者を追ひ馬に掛のせて興國公武藏守利隆朝臣の事此時新藏と称し申を十四五騎にて引たる處に参りて申を又國清公の御前に参りて飯沼を組ぐ討てひと申ける

飯沼が曽へ小田原鉢刀へ行光の作脇差へ菊一文字なり森寺が従者分捕して今森寺が許にありといふ森寺が飯沼を討取ること関ヶ原記其餘の書にも池田備中守として有るは謬なり

岐阜の城攻に池田家の士南部越後門際に押詰られて門のくぐり狭くくみたるに支へて入り得ざるに母衣串をぬきて入べきといへども此くぐりを抜くまじと呼る其中に門ひらきて馳入るその武者ぶり甚見事なりしと其時の人いひし

とるん

岐阜の城に諸将御寄る時一柳監物直盛の兵一騎先駈けて川に馬を打入れ直盛に付て目付兼松又四郎正儀九尺計の十文字の槍を提鹿毛なる馬に乗て堤の上に引へて是を見あるを剛の者と老武者ゞ若武者らと問ひしに直盛聞て安井新九郎とそ今年廿二三なや成けんと答ふ正儀吾ならば功名をとるべきに若武者なるを惜き事なとのひも終らぬに安井向の岸に待うけ敵の中に入て討死しなり直盛馬を蹴て進むけるきに見えしを正儀御止め早くひかせ申す有てこそと云まに馬を川に打入られし直盛も れとゝと渡さるに敵敗北しけるに正儀闘魔堂のこまを追ふる味方をれ直盛など追討ぎなやと問ふに敵

なや陣を整へさり引くさに一定味方崩るゝ百々水造い岐阜の古兵なるを止んと思へども地の理なくて退くるん今見るを返せとのひも終らぬに竹林に鉄砲を打うる正儀少しもさゞを相向ふ事なくて有て城兵遂に引退く

一説に津田藤三郎光房い秀信の士なり敗軍の中に引返し朱の物具に赤おどろの鹿の角の立物打る曽て着月毛の馬に乗て引色に成る味方を勵し散々に戦ひける兼松見くよき敵なりと目とりけて追るに其間十間計なる時津田光房引返して城に引取りけり黄母衣なる武者取て返し正儀とつゝ合戦ひしが相引に引くといへり此時なや又前に川を渡しる時の事なや詳なる

正儀敵是にて一両目有に似り此り返さるといつまけり直盛岐阜の町口にて将机に倚て槍を横さへ敵出べ一槍せんと正儀の方を見やるに正儀いや敵へ出候てゞと云に果して軍へ入りけり亂あづまりて後直盛正儀を饗し今度の軍毎時仰の中りて候中にも安井が討死を察せられいつる子細にひと問に正儀聞て死生有命と申いそ人力の及ぶべきにあらず川を渉りて先陣なる時に馬のはゞ場二三十間も置て敵の前を横さまに乘り行に味方つく時大音に名乗べき事に左もあるべく唯一騎岸に打上り敵の真中に入り討死せんに敵に利を得さるべし時により地に進退の有べきなり候物おりと能老兵を承り置て六十に及て猶まづく武功をも遂ん事ぞ語りける

台徳院殿御上京の時熱田にて國士御自見に出る時兼松も同く出らる上井大炊頭利勝を以て今川義元合戦の時功名利根山にて信長より足半を賜り事猪子内匠兼松と年いづれまさるやと御尋あり御覚えの猪子を年まさると思召ものとあり兼松承り信長義元合戦の時朋輩七八人一所に打立ひが馬を乘そこなひいる事と見ゆる鑓を逆に掛けり心中に不吉と思ひ其日勇こゝろく進み兼ゆく功名しる者手をあさぐり見苦しとて朋輩どもとりこる首の血を甲に塗草摺に泥とぬり朋輩の中に交り信長の前に出ぬる義元の首を信長見て悦る時に参り合せる刀根山にて前夜觸有しにて信長もや打立をゆる故草鞋もく間もなく跣にて首取べく信長見て太力のさゆり

付られ候る足半を賜りし別に差る事も無と申上る利勝猪子と年はいかゝと問給へ御見ちがへ内匠は二つ若と答ふ利勝御覺を御自慢のこゝろにて申さるゝと申さるゝ所あんとしに兼松いやく詐い申さるゝと答へ給へる事を利勝申さるゝ大に御感有て時服に黄金を添て賜ひけるとぞ

○河田の渡をこゝ岐阜に向ふ前堀尾信濃守忠氏川岸に陣をとる池田家先陣の士大将伊木清兵衛忠次使を以て池田が者ども川に打入て後渡さるゝ今度の先陣い池田が承りたるぞ申ける忠氏聞て暫く馬より下立て吾下知を待べしと申けるに山田多門兵衛十五歳軍いけるを始て馬より下んとするを從者馬より下る事や候鞍の前輪に取付俯して成て待せられと教へらるゝ山田たゝ

うけ給へ有て忠氏の旗本に法螺の聲せしに我先にと馬に乘て山田真先に川に打入て渡しけるに遂に一番首を取る從者の物語るけり故ふる吉晴此日の勝軍の告を聞首帳を見らるゝに首一ツ山田多門兵衛と有を讀ん終らぬに近きころまで竹馬に乘る童のなれや功名しけるよ父なる人居給へいとゞ悦んで涙を流さるゝ又梯權八の功名の無いとて討死せんい知らぬ功名は二三人の中をとゞめる者よりなどと有やまれしなれや飛脚來て權八一番にて首を取けるとも手負て帳に記を事なるらんと告らるゝに吉晴吾見る所よも違はじとおもひ云給へり

常山紀談卷之十二終

常山紀談

十三函

東京圖書館

和書門	雜史類	一三五函	一二架	二六一號	一五冊

常山紀談巻之十三目次

一 氷田助右衛門見積の事
一 後藤又兵衛決断の事
一 合渡川合戦黒田三左衛門毛付の功名の事
一 神谷小次先登の事
一 藤堂玄蕃赤坂町を鎖むる事
一 寺澤廣高加藤嘉明度量の事
一 春日九兵衛見積の事
一 村上彦右衛門先見の事
一 七方三九郎武功の事
一 小栗又市谷々見廻の事

一 秀家夜討せんとしてそれし事
一 株瀬川合戦の事
一 稲次右近功名の事
一 淺香庄次郎働の事
一 林半助殿の事
一 伊藤金左衛門三宅平太夫後殿の事
一 毛屋主水物見の事
一 関ケ原合戦嶋左近討死の事
一 飯尾甚太夫一騎先駆の事　附成合平左衛門ゞ事
一 蒲生備中父子戦死の事
一 大谷吉隆平塚為廣寂後合戦和歌贈答の事
一 瀧川内記功名の事
一 本多正重の事
一 梶左馬助御書を認る事
一 田邊甚兵衛幼年功名の事
一 辻小作中黒道隨ゞ事
一 嶋津義弘関ゝ原退口の事　附大坂の商賈義氣ゝ事
一 東照宮勝関の儀を延ゝ事

常山紀談　巻之十三

備前國　湯浅新兵衛元禎・輯録

岐阜の城攻

細川忠興七曲口へ向はれしに米田助右衛門おれ見給田今朝より矢倉より打出る箭玉次第に少くなり候へ本丸へ引入やすく打破るべしとなれば忠興子細はいかに米倉にてやすく打破るべしとなれば忠興子細はいかに

○

岐阜を攻破る時黒田田中藤堂等の諸將犬山を押へとりしに犬山の城明のきたる故岐阜を捨て打向ふ所に大垣より石田嶋津二万餘り打出て荒れ来る頃しも八月雨の後合渡川水うさ増りて諸將香ヶ嶋の札地辻にひかへて各將机に據て川をや渡を待てや戦ふと評定して決せず高虎銀の天衡に立物打たる曹を着黒なり

拙き武者ハ黒田家此士大将後藤又兵衛なるべし存る旨を聞
ずやとて扇を揚てまねきれしかば後藤はろをはるかに来り
跪く高虎いふ此川を渡るべなの待て利有べきと先の程もい
へども決せずといくれしかば後藤打笑ひ評定も時ゝより候今日岐阜
の城攻ゝ後れまゝゝ爰にて一戦なくバ内府ゝ御面目ハ候まじ川を討
死の場ときゝえられん事然るべしもしのらばハ男子にてハ候まじと
大言されバ諸将尤なりとて川を渡されぬ

○

合渡を渡る時長政の士大将黒田三左衛門可成川の東より遥ゝ敵を
見渡して長政のかゝへる馬を乗ゝせ朱の枝鈎のさし物指て黒毛の馬の
たくましけなるゝを乗とるをよき敵なり必討取べしとふ長政勝
敗ハ運命なる事なりなどなやゝ敵を討べきさまなりひそとりまれ

しゝ可成耳ゝも聞入ず川ゝ馬を打入向ふの岸ゝをせ上り遂ゝかれ
武者を切て落し首ゝさし物を添て得たりと石田が物ぬし村
山利助とゝる剛の者なり可成ゝ此功をむなしくせり毛付の功
名なりたくひなきゝを誉れなり

○

合渡の軍ゝ長政ハ内神谷小助先がけして川をこゝとり待うけくる
敵ゝ中ゝおゝいて懸入られバ槍ぶすまゝ揚られ既ゝ危うき時長
政の軍兵進みかゝりて敵を追とてれを小助流るゝ血ゝ朱ゝ染ゝ
るを戸板ゝ載て長政の前ゝ来る小助ゝゝ我と先を争ふ者長政
なりでゝ有べうぞと思ひ長政をきゝと見て小助ゝゝ先立て槍
を合せ候者一人も候ゝとゝ中られば長政汝ゝて誰ゝ先がけ
へき手負候ものゝ氣をもりて物ゝふゝきとゝられ

小助後に有馬の温泉に浴して剃愈る

○合渡より東國方の軍北に追て赤坂まで進みゆく時高虎の士大将藤堂玄蕃赤坂の町口より入大音あげ百姓商人をかやまでもなく悪逆の輩を討平げ静謐を致さん為なり皆ちりぢりさわぐべからく觸通り其後小家一つ二つ方壞ち東の方れ町ぐられて相圖の煙をたてり高虎大に悦んで傳へ聞し古の王者北軍を學ぶ玄蕃武く其日着られし唐冠の曹を脱て奥へ入られぬ

○関が原にて東照宮いまく岡山に御着陣なれ已前諸大将地の利を擅く面々陣取とりしに或夜諸陣俄に騒ぎ寺澤志摩守廣高聊ながら徐に我既に聞とりといひく鼾かいて寝られ

れり廣高士六人歩の者六人を物聞に三番に互にかりて途を異にして小の事も必告来る今夜告来らざれば夜討に成べきる事を元より知れく〻ゆえなり其あるる夜忍ひく加藤嘉明の陣所を通る者なりとて忍び火付切て捨とりふに嘉明其士ハ主君の為に死を顧ず吾陣所の備怠られ彼いらて吾を窺ふべき殺と殺さると勝敗にかまはとて追ておくまじとなり

○九毛兵庫が弟春日九兵衛大坂より大垣に到り諸将の内に二心ある人の候陣所に有様必定味方敗北ぬべく陣替せられと三成にすゝむまじども是を用ひず果して敗れぬ

後に前田利長春日をまねかれしに江戸駿府を憚り仕ふる事なくして京極若狭の守高次ハ東照宮の婿なるゆ

又ちひて乞招き寄せ禄千石に過へられしとの仰にまりて京極家に仕へ侍り後岡飛彈とりふ岡越中を飛彈の子なり

○

関ヶ原の時大坂より舟手村上彦右衛門菅平右衛門九月十二日の夜兼名に着十三日諸將に對面し安國寺に向ひて味方陣所の体見及ひ〻る所心得られしとりふ安國寺吾もさこそ思ひ候へされども関東者一人に上方勢十人の積りなれは四五日もちこたへなんは必勝〻と答ふ村上味方山どりの有様高くそりなりて戦ふべき色にあらしとく下りあふ事も叶ひがたからん東勢ハ物〻故陣所あらく見ゆ一兩日を過ぬして合戦なら覚束なしとりひて帰りしが果して計り如し村上ハ敗軍の時阿濃津より九鬼大隅の守嘉隆の許に夫より上方に入れりし

○

関ヶ原ハ軍の前有馬豊氏大垣と川を隔て陣せしに豊氏の兵士方三九郎を始十騎川を渉り敵少し出るを追立大垣の矢倉の比下に馬を立て聲々に名乗りしが方鐵砲を打懸り三九郎左の肩先に手負ひ續く味方ゆなれば十騎の者もそこくと馬を引返しなるを東照宮も聞し召るるとなり

賞功にすかりしに方三九郎岡本彌一右衛門渡邊佐左衛門上田波と言合せ出奔しり土方に養母を百姓のもとに隠し置ころを豊氏番くを付て守らしめられしに三九郎帰りて養母を人質にとられし上ハ少かくの事をもに及ひ腹を切んとりふ豊氏尤なりとゆるされくもの如く仕へ居しかも同しく立去しものなれ所も有やとて養母を打

具して又出奔し加藤清正に五百石にて仕ふ豊氏かまをれ
ば落ぶれて年月を經る所に外舅中内惣左衛門といふ者豊
後に在てまゝ和寄より中内が長曽我部と長臣なり大坂の事
起るに及て長曽我部と共に大坂にありしかば三九郎も
打具して元親をこを二つに分け國澤掃部と土方とにつく
三九郎此時六左衛門といひし五月六日に矢尾の堤森有所
に東に向て押る時朝霧深く物色定なきに森の南より紺
地に白ぬき付たるをこを部立て敵寄来る堤せばれば
引おろして立る処に敵が藤堂の先陣にて旗を堤の下に
おろすを見て敵が逃るとりひて馬より飛おり突てかゝるを元
親大音あげ槍を横に持引付て突崩して候へ一人もゆるさじ

るゝかゝるを下知して十分に敵を引受一同にどつと起立て切崩
追討にして所に渡邊勘兵衛押来る六左衛門散々に戦ひ槍
ゆかゝるゝ後に人敵の槍を奪ひてをこらに紀けりかゝる所に元
親先陣敗北掃部も討れ大坂の諸陣皆やぶれしかば三里許が間
援くべき味方もなく元親も久寶寺をこして引退きるに勘兵
衛をこひ来り鐵砲を打かゝる三里の間にて旗竿過半打折れ
とも旗きぬ一つも捨ぜこれをぬかせて城にもせ帰りり落城
の日元親僅に士十二人打具して八幡の方に落るに六左衛門
も従ひしに元親汝等とく是よりれもひくに落よとりくもい
づくまでも附そひ申さんとりひけるを元親志はさる事なれ
ども遂にいなむ為にようざる間落よとりひしかば中内一人を

とまりて其餘ハ落行りて六左衛門其子孫今池田の家に仕へてあり

○東照宮岡山に御著陣の夜小栗又市露に濡て御前に參り谷々心元なく存打廻り見て候に上方者何の手だてもなく候とて聞召井伊兵部に下知して宵より菅澤次郎右衛門を山々谷々見て帰れとてやりつるに仰のごとく

○関ヶ原の時東照宮岡山に御著陣を秀家見て敵の陣所わさはに見ゆ夜討せんとありしに三成かゝる大軍にて夜軍ハ利なきものなりとてやみぬと秀家後まで悔まれしとや

○関ヶ原の軍ハ前九月十四日浮田石田軍を出し一色村に兵を伏せ揺瀬川を渡り中村式部少輔の軍兵ハ陣所に押寄て鐵砲を打るゝ中村ヶ士竹田五郎兵衛先ヶけして打て出る有馬豊氏も陣所相ならびに兵を出し竹田に討死し伏兵に射るゝまゝに敗北しなれ中村ヶ士大將野一色頼母白石ろゝけ栗毛なる馬に乗崩れに味方をなげ返し合せ戰内匠引て通りしを詞をかけ何とて返し合せさるやとりくで戰ふりかゝり手負とりて川を渡る頼母ハ鉄砲に打くり馬より落しを其組の士松村清助頼母が兜をとりて引ずり退けるを敵追来れば頼母が上帯を切刀脇指なりとりて退きぬ其後冨村といふ者頼母ヶ首をやるる

其前の日野一色戰二人國清公福嶋正則等の諸將ハ前へ出岐阜攻落されハ功名致すべきやうなく候さて此よりハ中村の者とも軍始仕らんといひしかるに軍始ハ[illegible]

ざる事をいふとて不奥なりし其中に正則目を見出し怒られ
る故左様にも仰らるさるかゝる候太夫殿のお付羽織の
しゝ故に見ゝくる事もあゝき部事太閤より以来先陣を
勤め何れの軍にも功名とけ候とかゝつかまつりて御目にかけんや
いひしとき

○浮田石田等の軍兵競ひくれば矢野助之丞金の團扇に指物林文太
夫に赤ほろかけ〳〵二騎面もふらさかけ向ひ進む敵を追崩しこゝる
有様目を驚かせり赤坂の御本陣より御覧せらるゝ井伊直政本多
忠勝に御下知ありて人数をまとめらるる此を抹瀬川のせり合と
いへり

○抹瀬川にて三成が兵勝に乗て進む處に有馬の士稲次右近鳥毛
の半月れさし物にて殿しるを横山監物と三成の士恥寄て引
組ぐり稲次の従者助け来り横山を引伏くる処に敵走り寄て稲次
の胄をとり方仰く稲次放さんとする時従者又助け来りて
敵を一太刀斬るかゝる処に堀尾忠氏のかろみ者そせ寄て誤て稲次
の手の者を切伏て首を取稲次は終に横山の首を取まゝ敵をも打取
り馬を静にあるまゝせて東照宮の御陣所に参りるを御覧ドて
先に此陣のかゝへとりて敵に向ひくる武者功名しるる者ぞ
と仰有りしに有馬法仰かゝへありて豊氏の手の者にて候と申に稲
次首帳を記せ處に行て従者を味方討に打せて候其首帳をば消て
給りて候へと云聲を聞し召何事そと問せ給へば子細を申かゝる
大軍のみくれ合さる戦ひに味方討もあるものとぞ仰らるる

其後稲次ハ六千石禄増奨へられ八十五歳嶋原の城攻ハ討死せしとゝや堀尾の家ハ士とも味方を討とる者と同ゝ様ハ預り居ん事口惜とやせしゝ忠氏の父吉晴是を聞彼士を召取返して別ハ子の足軽二十人預けられゝ

浅香庄次郎後左馬丞ハ奥州葛西大崎の水村ハ仕へ其の頃関白秀次の不破萬作蒲生氏郷の名越山三郎と共ハ天下ハ聞へたる美少年なり水村家滅て石田ハ仕へゝりしぶ咎を蒙る事の有しハ株瀬川なて能の皮れ羽織を着銀の大釘の立物打たる曽なて中村ハ召れ士梅田大蔵ハ首を取り大垣ハそせ帰り三成隅矢倉ハ居たる下ハゆして勘氣をゆるされ候へと呼つる三成聞て能なて軍ハ出とゝひられを又馳行て三成ハ軍兵を引揚ゝり後ハ加賀利常ハまねられて奉公しゝり

林半丞ハ美濃安八郡青柳村の百姓なりしゝ石田ハ仕へて禄七百石使番ゝり石田兵を起せの時佐和山の城中ハ軍兵を集め書院ハて饗禮を行ひ吾今かゝる一大事を思ひ立運を天命ハ任せとゝくも汝さちゝ武勇をひとゝくハ頼む處なり其旨を存して軍忠あらゝば賞へ功ハゝるゝし其約束の印とて酒盃を座の中央ハ出しゝる時林遥の末席より進み出て軍ハ臨みて一番ハ知らぬ二番ハかゝゝ半助とゝゝ召まとて其盃をゝりて飲ゝられ皆ゝく花ふるまひとゝひしゝゝ抹瀬川なて一番首をとりぬ斯て兩軍物別れする時稲葉助之亟ハ金の切裂の指物なて秀家の軍士ハ殿ゝ林ハ白ゝちゝのさゝ物指て乗さゝり殿しるゝ猶も本多忠勝ゝ兵ハ向て只一騎輪

をかゝる有様敵ありとも思ハさる体なりしを東照宮御覧してあ
ま迄不敵者哉武功ハ志ハ者ハあの武者の草摺をかゝけと仰有り
関ヶ原の軍ハ前日伊藤長門守至孝大藪の陣所ハ石田使を以てゝ
大垣ハ入ゝ一所ハ入ゝれとゝ送りしゝ至孝大垣ハ行所を徳
永左馬助壽昌市橋下総守正舞ハひるハ伊藤金左衛門紫ろ
ハ蛇の目ハ紋付ゝるをかけ三宅平太夫と唯二騎殿しゝ十四五騎
斗追かゝり伊藤大音あげ大事の殿ハ勝負すせそと言て引
退ゝ三宅ハ馬ゝり下立しゝ関の聲ハ駭て馬ハ口ハ付ゝる下人を
ふみ倒してかけ出しぬ歩立ハ成て静ハ退ゝハ日ハ暮ゝり
かゝる處ハ正舞の兵市橋勘左衛門追つゝて詞をかけ槍を合
せんときしハ三宅とハ昔ゝり親しゝ深ゝりきべ互ゝの聲

を聞知て夜中誰も知ざる処ハ行きあひりとそ辛ろき奚ハ
て戦ふとゝ何の功名ゝ有ゝきりぎとて立別きゝり至孝大垣ハ
入て三宅ハ討ぬしゝんとをしむ處ハ帰て乗りてゝゝ
といゝ名至孝悦んて鹿毛ゝる馬ハ鞍置て與ハ三成ハ黄
金三十両引出物ハそゝりる伊藤ハ十六七のゝゝり功
名ゝりて赤きてぬぐひを鉢巻としりて敵例の赤手めくひ
又出ゝりと世ハりゝきしし者ゝある時軍破れて川岸を只一
人引退く時餓疲きるハ敵一人腰ゝる兵粮を遣ふを見走
ハ寄て斬伏腹をさゝて飯を取出し川水ハひゝしし洗ひく
打喰ひ陣所ハ帰ゝゝゝゝ
関ヶ原ゝて諸将物見を出されしハ恥帰ゝて敵或ハ八九萬又八

十萬計に候らんとて所々黒田長政の物見毛屋主水敵に一萬
ばかり過候ひとりとりふやかて東照宮の御陣所に参て申せば敵
に大軍なる處汝が詞こそあやまりれと仰られしうに主水拳り
允敵に七八萬ばかり候らんさきとも両軍の勝負を計あてれのか
身に懸て軍に志候兵に幾程も候ふ石田小西等が頼切なる者と
も彼是合せて一萬計に過候きと一陣敗北せし餘を戦ふして
敗北候べしと申ふる東照宮主水に敵の内通を知るるや軍
の情にふ通ずるふと感じさせぬい御手うう饅頭を賜
ふるとかつ擅あて此を食して出りる後彼に本姓に何とい
ふやと仰有れば毛屋と申とて北國の手
屋とりふ所にて功名せしゆゑ毛屋と姓を更つると聞とりと仰有

り主水も宇山崎源太左衛門に仕へ後黒田家に奉公し朝鮮に
て平安道の小川を渡せし時味方に遣に渡せるやと云ふに
主水味方に川上をふふ候子細に馬の沓草鞋の流れ候故に察
し候とりくべ長政尤ふりて渡さきしとふや主水後千五百
石の禄かり此時に旗奉行ふしが合渡の軍にふりふ
長政の旗しどふに成し時主水馬ふ飛下り槍の鐏を以て旗
竿をふつむけ汝等ふ旗を仰けふべ忽切て捨んと下知して
岩巻とりくる旗さしの強力の者に取分てかふ戒め主水も恵
りしと聲をかけて押立てふ又関が原にて長政の旗卑に所に
立ふりれを長政あふの高に所に立ふと下知せふる主水進ん
ふる旗を退ふるるふ敵に勢ひを付候ひふんとて遂に

○

旗を立直さるゝ長政後より此二事を賞せられ

黒田長政へとより石田と不和なりしゝ関ヶ原合戦の前さぐり立てゝる士十五騎明日の軍まめけ懸さぐりに吾馬の廻りより引そひて軍はゝより石田と手を取組て討とゝんと用意せられり石田が陣の前より柵あり嶋左近目仲左の手より槍をとり右の手より麾をとり百人計引具し柵ゝゝ出て過半柵際より残し静より進ゝ懸りて長政馬ゝゝ下立槍を提てゝゝみ合てる處より散六之助政利少し高き處より上り五十挺の鉄砲を透間なく横合よりせられて真先に進んでる敵手負て左近も死生ハ知らず倒れしゝ伏ひるむ所を長政どうと打ゝゝ切ゝゝされゝ左近ハ肩より懸けてそこを退き給ひ後より六千石の禄賜ゝり和泉と称せ長政筑前の國領せられ

て後関ヶ原ゝゝ撰しあひ長政のかゝへよりて軍しる人々集て閑話しるるゝ石田ヶ士大将鬼神なりも欺くといひる嶋左近ヶ其日の有様今も猶目の前に在ゝ如しと云ゝる其物具の事をいひ出して更に定ゝゝ人々口々にまよひしるは其軍れ頃石田ヶ方にあるる士の筑前に仕へるを三人呼寄て問れハ左近曽の立物朱ぬ天衛溜塗桶かは胴の甲に水綿浅黄の羽折を着とりしと語る人々驚きて近々とつめ寄るに見覚なる事能うゝくろよ口をしき事なりと云しに其中に取とき剛の者ぬ云るハ見たがくるハられるるゝもこゝゝ哉左近ヶ引具しる人皆きゝしる物しるく七十計ハ柵際に残し三十計左右に立て麾を取下知しる有様つくづくと案るに三十人計の兵も槍の合ざき際にさつと引取

味方をうしなうと追うけんを近く引寄せ七十餘人の者ともをいく聲を揚て突かゝり手の下より追崩して残るなく討とゞめんとの手ごゝろ

ありき今思ひ出れを誠に身の毛も立て汗の出るなりかゝ酒汲う

けゝ心安き朋友と物語をするとへ大ようとうをゆ人々大うと

目のたゝまひい失ひゝるゝぞ若其時横合より鉄砲にて打きく

めきいこれらか首い左近ゞ鎗にきゝ貫れをん見とゞくなりとて必

ゝも恥にあゝたゝとそりひゝるる

○関ゝ原にて飯尾甚大夫安信只一騎黒田長政の陣ゝ前り馬を乗

寄せ大音あげて名乗りをいさ討取んとをやりをの若者ども

進ゝるを野口左助益田與助見て只一騎先駈しゝる志昔をい

ゝ一ゝ谷の水戸口にて熊谷平山ゝ終夜名乗つる体なり平家

の士出合ハさりしも志の者を助んとなるべゝなやすゝ討ゝるをゞも夫ハ情なゝ後を見ると

槍を横くて制ゝれべ飯尾度々名乗て馬を引返ゝり飯尾ハ豊後國冨来の垣

見和泉守ゞ兄利右衛門ゞ子にて五千石の禄にて秀家に奉公ゝ居ゝり

株瀬川の軍に中村の士成合平左衛門利忠牛の舌ゝ物に

て真先かけゝるを飯尾討取り其後黒田家に仕へ千石の禄鉄

砲預にゝ長政成合う首取りと聞彼成合ハ世にかゝれる花

勇士なり其首を取れバゝて三千石増與へられゝとぞ成合も

と中村家の士なり天正年中秀吉蒲生氏郷水村伊勢守秀

俊に奥州數十万石賜ゝとゝ両家とも士卒の少きに困ゝうバ

秀吉下知して日本國中の士主人に不足ある者共或ハ主人かま

ひ有面々皆両家に行て禄を得べゝ主人咎めバ秀吉相手ゝ

んと札に書て立らきしうば成合へ和泉小水川の一番鎗を合せ吉の感状賜りれとも一氏ろづうに三百石あしくちきし故水村ゥ許に行て三万石佐沼の城代ろしゝが水村ゥ家亡ひて後後中村ゲ家に帰うて仕へ殊瀬川にて討死しとりろ

蒲生備中真令い石田ゥ内にて聞ゆる勇将ゝり関ゲ原の前軍評定の時真令明日ハ偏に必死と思ひ定めちろべゝと云嶋左近明日先陣に進んで忠義を曽とゝて打勝べ和物をとりくゝ真令まゝ昔より利を得るハ天のたまけるとりくども軍の正しゝ和と法令の厳しきとの二つにりゝ内に省とまゝ偏に必死と思ひ定められハ勝の半なるべし左あらぬい復御目見致さゝとて座を立り真令元ゝり敗軍をさとりて三成に必死を究めし詞を出しゝり斯て関ゲ原にて只一騎三成ゲ陣に乗行て何事にうりひろに三成ろうなにくゝ真令馳帰り競ひかる敵に向ひて散々に戦ひろるゲ織田長益に合て昔ハ蒲生の家にて横山喜内令ハ石田ゲ内にて蒲生備中にて人に知れる者なりとりくべ長益神妙に候れに降参せとりひも終らぬに何事ぞやとて拝ゝ打に斬て打落て長益の従者千賀文蔵槍を以て突通さを其柄を握て引組とるに文蔵ゥ弟文吉刀を取直し真令を刺て遂に打取り真令ゲ子の大膳ハ戦ひ半に首一ッ提て父に見れバ功名も何にせんとりうを聞又東に向ひて押ろる敵に合せんとき しゲ父討れゝと聞 まゝそゝ我そこりて三瀬川あさみ深も君にあらせんとりゝ歌を高ちろに唱へ自害しり大膳幼より戯を好ゝ関ゲ原に出陣の時母られ汝ゲ富貴を願ぬに

へあるべきなれども弓箭の家に生るる身は昔より名を重んずる習ひなり危物二つに兼ねがねは身を全くして名を忘れざるとは言べきなりといひしなり父と共に死して母の戒に背かざるべきなり

○越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉隆は會津征伐に従ひて兵を出さんとせしに石田三成より摂原彦右衛門を使として誘ひて佐和山の城に来られよ密に評議すべき事有と云ぜるるに此は心得きとりくと也是非を論ずべきひけまべ止事を得ずして佐和山に到る三成悦で今度関東を討立ばつき謀ちなで語りて大谷驚て故太閤常に徳川の智勇に備まくるを崇敬なるまし如今徳川家を打べん事おもひもよらぬとりひれ是三成我上杉景勝と許て景勝旗を揚られれり其約を変じて景勝一人を攻殺さんと事本意に非ず運を天命に任せるの外道なり豊臣家の恩を厚く蒙ぶる身なれば秀頼公の御為に大谷刑部一人命を秀頼公に奉りて今度の軍に討死せんと但かの大事を思ひ立ぶんに思慮なくべ在事二つ有申出して見ん用ひらるるやと以ば三成いとて所存を防ぐへ在と悦しかを大谷曰世の人石田殿を除無禮なりとて未々に至てもこころよからざりしかくり江戸の内府へ只今日本一の貴人なれども卑賤の者に至るまで禮法あるく仁愛深く人のかたき従ふ事大方なれば是一つ次に大事に智勇の二つ有てはなり得ずと石田殿に智有て勇足ざるると存候今度毛利浮田も皆同意しくる人々なり必しも頼ことすべ在よりしば水口の長束と計り内府関東に帰路の時石部にあるとりこして旅宿の時夜討して

火をかけ十死一生の軍せバ勝利疑なきまゝに圖を外されぬ内府関東ゑ帰られるハ虎を千里の野ゑはなつが如し十全の勝をなるちれば又圖をなづして悔むとも益なゝ此上ハ命を秀頼公ゑ奉るの外他の道なし士卒ハ皆平塚ゑ下知せゝせて候へバ其志計ゞとしくゞもまも別の事ハ候ゞて伊益の驛ゑ至り平塚ゑ告れむ平塚大ゑ驚き三成志大りとしくとも六軍を率るべき將器なし然るゑかく與せられしを禍をまゝとりふゞ然れとも既ゑ許諾せられるきバいんとも去べくとて三成ら送り来りし使者ゑ心得候と我答へる吉隆敦賀ゑ帰しゑ関東勢岐阜を攻落しけると聞て敦賀を打出て関ゞ原ゑ到りしゞ秀詮の裏切をゆとよりり悟られハ僅ゑ六百餘の陣を一手ゑかゝ関ゞ原ゑ打出槍

衆を作りて秀詮ゑ向ふ吉隆ハ目を病て士卒ハ皆平塚ゑ下知せゝせ練絹の小袖ゑ上ゑ村蝶を墨ゑて書るる鎧直垂を着四方取ゑかゝる竹輿ゑ乗るゞ秀詮裏切して討てかゝられしゝバ大谷齒をかゝ秀詮の不義骨髓ゑ徹せゝ敵の旗本を目ゑかけて切て入べゝと下知しゝきを木下山城守大谷大學戸田武藏守重政平塚因幡守為廣ゑを寂後と思ひ定め面もゝを切て懸りしゝバ秀詮の先陣立足もかゝ敗北せされども藤堂高虎を始め東國ゑ軍れかゝうけ進ミ来れを秀詮の先陣もり返して討てかゝるさきども死狂ひせる鋒先ゑ秀詮の先陣又追立られゝ為廣敵ゑゝ討ゝ其首を吉隆ゑ送り此首自ら討取候冥途のつとゑ参らせ候日比の約束只今討死しゝ候ひんとゝ自害候て人手ゑかゝられざきと言遺ゝ外

に歌一首書添へり

名のたかきつる命を惜かりつひにとゝまらぬ世やと
思へを　一説に秀詮の士横田半助を討取其首を吉隆に送るとゝ
もなり

吉隆使に向ひて武勇とひ和歌といひ感ずるに餘り有りや自害して追付再會さてしと巻へて甥の祐玄とふ僧に返しを書せて使に渡しけり

契りあらハ六のちまゝまてあれ先なる事へあるも

かゝて平塚へ戦ひ勝れて畔に腰うけ息つく処に小川土佐守祐忠が兵樫井太兵衛槍を提歩み寄る平塚立上り我ハ平塚因幡守なりとて散々に戦ひなるが終に倒れなげら十文字の槍を投出し汝に重寶にせんとて討れぬ戸田重政も思ふと切て廻り討死しけれ大谷が軍敗れて吉隆自害しけり行年四十二歳とゝや岩佐五助首を羽織に包み其邊の田に中に埋み先手に向ひ討死しけるを藤堂の士大将藤堂仁右衛門其首をとりて御旗本に奉りけるに東照宮五助へ聞ゆるもの也歟屠なるゝと仰有りけるとか有しとそ

瀧川内記辰政が左近将監一益が末子なり秀詮に仕へて松尾山まて秀詮の軍敗北れ時りけるみうる敵を支へ従者に首五とらせ秀詮のもとく持せやり其所をさゝで吉隆が兵に槍を合せ岸より下る敵を突落しさきへ山田喜内其首を取敵なる競ひかりけるを笠地兵庫と俱に散々に戦ひて首を取へけり後池田の家に仕へて禄三千石士大将なり此軍の時廿四五計の年こゝや

辰政其始織田上野助信包に仕へて十六歳の時小田原の軍に信包織田常真に對面せんとて従者を遠さけ辰政只一騎を具してあり むらきりに五川の丸に横筋ひに鉄砲を打かくる辰政信包の失面に乗ぬさぐりしゆへ鉄砲の玉三つあくる信包大に感賞して脇ざしをあくらる辰政此時七郎ばりひろ池田家に仕へて丹波と称し又出雲と改む

関が原の戦ひ九月十五日辰の刻過るまでハ東照宮桃配に御旗を立られ候所に本多三弥正重来て今少し先へ御旗をすゝめ給へ然るに是ハ敵合遠しと申を聞て召口にきの黄なる男にていそれざる事なしと仰られバ三弥御後の方に廻り口にきを黄なるもせよ遠きを遠しといとりごと申ける

三弥ハ佐渡守正信の弟にて若年頃武者修行して度々功名ありし長篠の後ハ瀧川一益のもとにありしつぎの軍にハ諸浪人皆そなへきに有りしに三弥手にあいぎりしバ一益さしもの高名人の今日の事ハいかゝと云此答ハ明日にて其ゆゑの日首二つとりて昨日の答是なりとゝ甚風流を好み物數奇りやしけなる事なく常に身に薫物をとゝ絶ずあり慶長元年伏見にて東照宮に仕へ奉りなるゞ以の外に直言なる人なり或時幸若八九郎を召れ高舘の舞終りて後武藏坊辨慶ハ世にまれなる者なり今の世にかゝるべくと仰有りしに三弥承りて今の時辨慶ハ有まれとも判官に似さる主君の候やうにと申せしとなり

大坂冬の陣台徳院殿に仕へ奉りなるに東照宮三弥ハよく

まゐる者ありと仰られるか其後一万石賜はりて東照宮御前ゑ召出さるゝ人げうをゝ一ありてまゐるゑ思慮一聞ありと仰有れて三弥将軍様へ仕へ奉りて候あのゝ主君ゑまゐ申者々きちがひにて候へと申るを聞一召又持病ありと笑ひるとぞ七十二歳元和二年病死せられ

○同一時祐筆梶左馬助かゆて御書を九月十五日の日付にて今日巳の刻御勝利と認置り東照宮御感有て十五日とゝるゝ左馬助巳の刻とゝるゝ左馬助参り敵ハ大軍なり巳の刻を過ぬゝ御敗軍と存ぬと申り

左馬助ハ上田善四郎が四男にて禄四百石後千石賜りて御使番なり

○田中兵部大輔の士田邊甚兵衛十四歳にて関が原ゑ出役者敵を突伏田辺を馬より抱おろゝ首をとゝせと也幼少にて武功世ゑ名高ゝれを黒田長政田辺ゑ逢て大ゑ感賞一田辺をとりうひゝる従者を呼出一其事を問ハゝゑ馬より抱おろゝゝゝゑ刀を抽てゝゝひれを恥めて首を取ゝと云長政さてハ勇士なりゝるハばゝかりゝゝ十方なき故とゝゝ一恥一免ゝて首を取ゝるハ勉めなげまんるゑゝゝ勇氣を致ぬ所なりとて弥ほめられゝり

辻小作ハ福嶋正則ゑ仕へ一が可児才蔵と親一ミ深く共ゑ世ゑ聞えゝる物一なり中黒道隨ハ石田賓客の如くゝて一置ゝり関が原の軍敗ゝ一時中黒唯一騎落行兵の中ゑ蹈止りゝんくゑ戦ひるを辻

見ていさ討ちをやとりくを可児なさけ方の事をもいふものの裁をも
けをやと云辻さてハ生ときとやを可児を好まぐて辞ー難ーとりひさ
て馳行ところを中黒馬を深田を打入れて諸鎧を合せても更を動
ぐ辻詞をうけ日頃のうつを助んずるを早く取付とく槍をさ
ー出ぐ中黒うるきハを命助うりても何ところせんとて既を自害まぐ
く見えーうぐ辻何とかかるぐきや神明をうけてりうちらぐとりく
ちとうつきうる我辻主従引あげて陣所を帰る可児見て大を悦ひろう
きて辻ハ物具脱て躾を打ー仰を打卧ーて只今まで敵かりー中黒を
物とも思ふ有様にて物語に中黒あるを侮ると心中を
りうきとも命を助けりー恩を思ひてさてやぬと後を中黒此事
を語りて笑ひーとかり中黒後井伊直孝招きて禄二千石あくられ

○

或説て丹羽山城谷出羽篠野才蔵稲葉内匠中黒道隨渡辺勘兵衛
辻小作兄弟の約束ーて武勇を勵ミ天下七兄弟と云ーとりく
関ヶ原の軍破きー時嶋津義弘真九を成て福嶋刑部少輔正武の陣ぬ
前を切拔んと一文字をかー通る正武十六才かけ合せんとする処を
梶田又右衛門（五左衛門）死狂はる敵を軍ハせぬとて追留りー東國勢おー
かけーうハ義弘の從子中務大輔豊久義弘の馬ぬかくを乘寄てさ
きやく体かりーげやげて大敵をかけ合せ討死さて義弘今ハ是まぐな
りとて取て返されるを阿多長壽入道成淳義弘の馬ぬ前を打ふ
さうう大将ハ千騎ぐ一騎を成候ても猶死ぜーて謀をめぐぐーー候
を道とそすれとく打破をて引退ぬくとりふまりを馬の首を

引直し嶋津兵庫頭寄後の合戦をするそと呼てさんゝに戦ひて討死しけり成淳が義に勵まされふゝ止り支へ戦ひ討死する者多くなる其ひまに義弘又士卒を集め列を整へ引退く時松平忠吉井伊直政あまたなとそ追かけけり義弘が兵とも種々嶋の鉄砲を腰に挿てそれまで物ともせしに一説に本多忠勝追かけるが馬を鉄砲にてゝせ馬たり落れを掘金平馳来ゝおのゝ馬に忠勝を乗せ其間に島津が軍隅々をとりくり又河上左京が従者柏田源蔵かゝりける鉄砲に直政中るをとりくり又松田某とりて朝鮮陣の時連て帰ゝ小児の成長して鹿の角れたる物の曽そ兵部に打留をゝ下知しけれは鉄砲をさし向なるに直政眉尖刀を横くわへて馬を乗かけられしに彼兵松田某と名乗て打しに眉尖刀に中り其玉腰骨に かゝりて馬より落ちきりさて亂鎮りて後薩摩の直政を饗せられしに直政松田を呼出し盃をとらせ関が原にて既に死にぐるりし身は幸にながらへて今日対面をする事を得たりとひして後こが片足をかゝ引かる武功の人に小禄とそ不足に候へ今日のもてなしに禄を増みたり候へとそれ彼物頭後に直政の呼出さきて対面に及び一時のめいゝ類一生に覚ぞとひけり

義弘近江の甲賀に かくり老翁一人家内者にして道をくさせ伊賀の山路を経て上野にて行着きたり爰に筒井伊賀守定次此城な

り使を以て嶋津義弘唯今打過候と云送りて行処に野武士四五百人ぐつと山の中に待うけたり義弘物の數ともせず打破り二人生捕て上野に立帰り大手の柵に水ためつけてそれより奈良に出かの老翁に刀をとらせ赤銅の笄をとらせ此をもつて必薩摩に来り今度の勞に報ぜんとて大坂に至り船に乗鹿児嶋に帰られぬ

一説に左近允と云姓薩摩にあり是は慶長の比大坂に商して年久く薩摩の米を買きたりける者なり関が原破まで後義弘大坂に着まで士一人先達てかの商家に行て彼商待ひたる体にて君はいづくにおわすぞ候と問ふ時ぞ討死あり一度呑へきば商家涙を流し年比厚恩を蒙り事なれば関が原破まぬと聞り必爰に来られんと相計りて船を設けて待居たるうちもたゝ口惜き事なりせ名て御供に参らんとて水中に飛入んとせをとゝ留め今の時なれば人心のまかり難くてかくは いひしかり實は一方打破て爰におはせなりとりくでかく疑れ恨なれともそれを云んに時移るべくと舟に乗せられん様をこそといひも終らぬに義弘来られしかば酒樽を積其間にかくのせ其身も付添て直に薩摩に赴し其者の子孫中一人薩摩に仕へ其子孫なりとりつたり

彼老翁薩摩に行てやとおもへとも道遠くきべ空しく過しに程經て人にいざなわれ鹿児嶋に行て笄を出しけきべなどく来らざりしそとくさまぐ饗し黄金五百枚あくへいざあひし人にも黄金あまた興へ人を添てかくり返さきたり

○関ヶ原の軍敗きーうば金森法印と〳〵勝鬨の儀式行ハき候へなやと申るを東照宮諸将の武功さまかく敵をバ打破りたきとも諸将の妻子大坂ニ人ぢちとりて敵の中さあり此を事故なく帰〳〵與へきうん間いつが心安んせん勝鬨をいかて行ふへなと仰ちれ〳〵を聞く人愈感服〳〵るるぞ

常山記談卷之十三終

常山紀談卷之十四目次

一 細川忠興の北の方義死の事
一 安養寺門齊三成を生捕んとせ〳〵事附姉川合戦の時門齊生捕きー事并遠藤喜右衛門討死の事
一 大津城合戦京極家の士戰功の事附赤尾伊豆が事
一 十時傳右衛門山田三右衛門死敵返〳〵の事
一 高次大津の城を出らきー事
一 立花家足輕銃砲の用意附細川家口藥入吉田大藏猿頭の事
一 伏見落城の事附鳥居忠政雜賀孫市を饗きー事
一 村上三右衛門大島源二武者振の事
一 三刀谷監物田邊城ヶ籠る事

一 田邊城 勅命ゟ依て和平の事 附細川幽齋古今集傳授の事
一 古田助左衛門 思慮の事

常山紀談卷之十四

備前國 湯淺新兵衛元禎 輯録

○細川忠興の北の方ハ明智光秀ゞ女なり父謀反の時忠興ゟ向ふ中さきゝ父なゞ〳〵かゝるく〳〵て事よく〳〵あるべしと申おもきまゝ滝川柴田なんとヤ人々多々きゝ必軍敗きゝ一女の淺き智慧ゝも口を〳〵くとそ存ト申へ男の身なゝんゝ鎧の袖ゝ生ぐりても諫めヤべきを力なゝ君もし與せさせなゝバ世の譏いゝでゝのゝとさせなゝんと涙ゝ沈まきゝゝゝハ忠興光秀ゝ同心なゝゝ其の後程經て秀吉伏見ゝ在りて諸大名の北の方を呼入て饗きゝ事の有ゝゝ忠興の北の方ゝくゝと聞き女の人おくて一間ゝ入りて他人ゝまゝゆる事やある

召さんとなるべとて懐より匕首を用意せられ此き
より秀吉の惡行いやましてくるり石田西國の諸將をくるひて兵
を起せ時諸大名の北の方を大坂城中に取り入れんとせるを
北の方聞て傅に付られ〳〵河喜多石見稲留伊賀小笠原正齊を
呼で吾此所を出ん事思ひもよらぬ城中に取こめられんハ恥
辱なりよく〳〵斷をやれへ猶きに入られんハ是を限と思ひ定む
べしと語られしくべ正齊殿東國に向せ給ひし時おもひ
くらざる事のあらんまん正齊ならひて武將の恥なさ〳〵
そと仰せ置られひき敵奪ひとらんとするあるべ其の時思
召切せのんとやしくるる處に城中に入よと使をいて
いらせくべ再三斷の旨を述られも聞き入きぞ七月十
七日の未の刻なりに大坂の軍兵五百餘り王造口の屋敷を
とりまきてとく城中に入りやさるべ乱れ入りて奪取ん
と呼ハり〳〵女房ども泣悲めとも北の方ハさらぬ
色もなくかくあらんとハ兼ておもひ設つる事ぞよと正齊介
錯せよとを生る世にまみえぎり〳〵人〳〵の死しての後も見られ
んハよろしくとて面に覆面打くけくり袴着て刀を抜胸よつ
きてらるくべ正齊眉尖刀もて介錯し其のまゝそこ
腹を切んとせし處に正齊が小性をり来たり殿の北の方と
同じ處に自害あるべ後の誹のいべきと云ひくるべ正齊あま
りのいとまなさるるとして障子の外に走り出家に
火を懸け石見と共に腹切て炎の中に死しくり伊賀ハ光

秀より附らるゝ身なれば道あるべき道もなれる人はまぎれて落うせゝり

忠興後はさゞ〳〵出しゝて誅せんとせゝるを松平忠吉伊賀ハ無双の鉄砲の妙手なれば助け置きて若ものは教へさせんとおひて乞ゝ〳〵忠興力なくて止ゝり伊賀ハ世の交もなく髪をそり一夢といひゝり百発百中の手だきなりゝ〳〵ども人多き中すてハ大きなるものも中らざりゝ〳〵ぞ

忠興の北の方かゝみとやれたもなん手ぎさみのやうに書きて硯の中に入れらゝ〳〵歌に

先さいハおもゝ〳〵うきりの命なるもまさりてをゝれ契とを

落出さるる女房の取傳へて世に残りゝるとなん北の方ハかゝるてうゝあゝんとおもゝ〳〵ゝ〳〵ぞ幽齋の妹年老て宮川殿と申せゝと忠隆の北の方前田利長の妹に吾ハ人おちゝに取らゝんと世の物いひのいわゝに落失やと存るあり同じゝとゝもるひ参らゝべゝ〳〵ども人多くゝてハ中〳〵うれ目や見る事のいらんとゝく此の隣の築地一重踰て落させんやとて宮川殿ハ建仁寺忠隆の北の方ハ浮田秀家の北の方に忍ひ行きて此の禍をのゝがゝさゝりとゝくや誠に義烈のゝまあゝぞ謀もゝ〳〵き人ありと語り傳へて袖をぬらさぬ人もなゝ

三成兵を起す時大津の城に入りて京極高次に對面し弥秀頼公の味方有るべゝとぞゝ〳〵る高次の士に安養寺門齋と云ゝ

者黒田伊豫ゟ向くひ今三成城中ゟ入る事誠ゟ天のあたふる
處ありかゝめ取りて関東ゟ奉らんと云黒田聞て三成を生捕
とも西國の諸將大軍ゟて攻圍むべしいそぎ防ぐ術のあるべ
きとて聞き入まゝ門齋あざ笑ひ三成ハ譬へバ乱の首ゟ其
の餘ハ手足の如し首を碎くゝ手足何の恐のゝべき
たとへおゝ寄せいとも固く守りて戰ふべし軍せゞして三成
を生どるゝゝバ天下ゟ名を揚勲功誰ゟあらぶべき吾年老ぬ
まゝ三成をくゝめん事いたやくゝんとて今村掃部をも勸
しゝども爭論ゟ時移りて三成城を出ゟゝり門齋ハもと淺井
長政ゟ仕へ姉川の軍ゟ生どゝ龍ケ鼻の陣ゟて信長の前ゟ
引出ゟ信長の曰ゝふ勝ゟ乘て小谷を打破らんと思ふいゝよ

汝ゞ命を助けゝん此勝敗いゝゝるべきと問ゟ安養寺兼り
長政ゞ父下野守小谷ゟ在りてその兵三千計もやゆひゝん然
ゟ疲まゝゝる兵をバてゝろゞゝ攻らきにくゝ事然るべゝ
らぞとゝゝさ信長打うゝゞいてくゝふ取ゝる首どゝも出して安養
寺ゟ見せて其姓名を問ゟ中ゟも竹中久作ゞ取りゝる首を
見て遠藤喜右エ門直継トヤ者ゟゝいゝゝる有様ゟいひしと
問ふ
久作いゝと齋藤家の士信長ゟ奉公しゝり姉川ゟて淺井の
士遠藤喜右衛門直継云ひくゝるハ信長晝ハくゝ守り夜々
横山の城を攻信長の本陣龍ゞ鼻を一夜討せバ勝利疑なし
といふ長政是を用ひぞゝゝる圖をゝゞして淺井の

家危き事朝夕まあり軍敗まん時信長を討ん者ハ吾あらと
いひしが いひつる詞のたがハぬ首を刀の鋒まつぬき大将の
實撿まそのくんと云て信長の旗本まで来りくるを久作討取
久作かまて必遠藤を吾討取るべしと人ぎしきりけ
りいりある故ぞと問まその子細二つ有り已に江州まて遠
藤と相知よく見知りけり是一つ彼ハ聞もる剛の者まで力あ
くまですぐれたり常まで進むまで先ぞちて退くまで後る是二つ
といひしが果して直継が首を得たり
竹中聞いて首一つ提殿ハいづくまでまんぞと云てちぐら
き進を来りまい敵のまぎれ入て殿を切奉るあんと思ひ
引組て討取りしと語りけるぞ夕部大依山まてもし軍破まん

必生て帰らト信長を一太刀恨ミやきんと遠藤がいひ
つるが果して其詞の如くありきといふ
遠藤ハ浅井家まで名有る剛の者まり信長江州佐和山まて始
まて長政まで對面あり公方義昭の帰京の次まで佐々木承禎を攻
撃べき事を議しが長政も力を合まべきよりしの約を定め岐阜
まで帰らるとて江州柏原まで宿せらる浅井縫殿中島助九郎
遠藤喜右エ門三人馳走の為柏原まで行しが遠藤早馬まて小
谷まで帰り信長を見るまで武勇猛まして謀たくまきき人あり
浅井家をくらぐべき事疑ひまるしが今日決断せらきんへ
臣信長を刺殺しやべしその勢ひまで乗て美濃まで攻め入りん
べしと云ふ長政聞て一度約して変ぜん事本意まで非ずとて

聞ざるべ直継再び柏原より赴き信長をもてなし信長無事より岐阜より帰らるり直継常は是を悔みける由姉川なれど獨もんで信長を討んとしけり

其次にいざせる首を見て是は安養寺が弟なれば彦六甚八とや者なれば死び一所ど契りしより先どもつる事なれば口惜きと

く首をそらしよりて其の後いものもいそぎかくる所より秀吉その比は藤吉郎と云ひしが栗毛の馬の汗うきこるを諸鎧を合わせ白沫うませて馳来りいざ小谷へ寄攻破るべきといひしより信長いやとよかくくしき軍はあぶなしとて許さるべ秀吉後悔はもんものを急ぎ寄せんと強きども信長聞き入るべきて止りぬ安養寺は只首をもて称らるへといひ

○

なるべ吾は奉公せよとてきまくなりめやさまども降参せず遂はゆるさるて小谷より帰りぬり安養寺はたびたびて信長軍を返さるしは浅井三年經て小谷の城落ぬり其の後安養寺浅井と京極と一族なりし故高次は仕へぬり若き時三郎左エ門とぞやなる

高次は関東より素より心を寄らるしを大坂より朽木河内守元綱を使はして秀頼公の外戚なる江戸大納言殿はゆるりあるべ人の疑を散せん為は幼息熊若丸を人質に出さんへとなり高次かるくしく敵の色をも立くしとて止事を得ず熊若丸を出して北國は軍を出さるるが岐阜の城はらるるよしを聞て北國は向ひる人大垣をさして引返へさる

しくべ高次北の庄より直に海津に かゝり九月二日の夜半に大津に帰り立花宗茂筑紫廣門栗津に陣せしを夜討にせんと謀らせしに黒田伊豫同心せずして止ぬさきべ〳〵関寺の門を閉城下の兵粮を取入き専ら防禦の支度せられ宗茂廣門石部より引き返へして勢多に陣取輝元の陣代毛利元康等ハ三井寺に陣し久留米秀包南條中務を始めとして三万七千餘四方より切寄せ〳〵る中に宗茂の軍兵ハ〳〵ぐ〳〵攻つめて死人をふみ越て乗り入らんとす防兼て京口の旗を考ゆり〳〵べ多賀出雲守真先に塀を打ち破ぶり三の丸に関を作りかけて ひし〳〵と切入りり山田大炊赤尾伊豆足軽頭に井口左京大橋肥後安養寺門齋使番山田三右衛門横山久内田中茂兵衛茨川口を固めてるに京口より敵乱入り〳〵で二の丸をさして引退ぎ〳〵高次使を以て何として三の丸をもて早く二の丸へ引取るや仕寄を付けられぬぞ防きげとかるべしもやく敵を追出せと下知せ〳〵しく門を開て切つて出る山田大炊十文字の槍の鐔を片手に取て曽の上へまてふり廻ト参るくと呼〳〵懸て一番に鎗を合せ敵二人突伏そり此きを山田大炊が茨川口の槍と世に称し〳〵り赤尾ハ猩々緋の羽折を着て長身の槍ふて数人突伏せ山田三右衛門も散々に戦ひけるが討死せり二の丸に引取る時山田と赤尾とかゝるく六度まで返し〳〵突拂ひける殿の振廻目を驚し〳〵り二の丸の門際にて赤尾山田已下ふみ止りくる時唯少齋門をして関貫をさして

赤尾ちらつもひるまず長身の槍をかとゝまる置敵の方へ足を投出し草鞋のひもを結ひ直し其の武者振を敵見て少しと めらふ時少齋門を開けん中へ入る事を得ゝり赤尾棄殺んと しゝるようといひしに少齋敵追ぎうて二の丸へ攻め入らんと まる故にそこ門をさして各を助ん為に城の危きを忘るべきやといひさばさばりの伊豆も答ふるに詞るゝり黒田次郎兵衛尼子宮内安養寺長門三田村安右衛門今村掃部赤尾久助中井民部小豆掃部油井周防等い京口を防ぎくるゞ三の丸へ攻め入る敵と戰うて討死まくるゝぞ銚子五郎兵衛い始関白秀次に奉公せしまくまて酒をすきくゝある時朋輩に語りくるゝ殿下のくゝへに立置きし白熊色白く丈長しあ

きに曽の上へゝみぐしくけて軍の先くゝせん物をとひしを秀次聞て銚子を呼まして是を看る酒を呑として彼の白熊をあとへらきしらで銚子誠にありがゝ存しれゝにまよせ詞ちろしめさまてはやらん若此の後軍のあらん時先にませしし詞をいくゝにせんといひくるゞ今日粟色のちゞ革に金の筋つくゝる羽折を着くの白熊の雪の如くなるを曽の上にそゞ十文字の槍を横さへ尾関甚右衛門と共に乱き入る敵五六人突伏て曽の鍔を傾け一足も引くまじいぞと呼くり討死しゝくり事る君い異なきども賜ひくる白熊まて敵味方の目を驚き討死をぞ遂とくる尾関へもと柴田勝家に仕へゝゞ後高次北國より帰らきし時尾関を近づけ夜酒を酌て密に

さてやくまくるハ吾石田ハ與まるよあらばゞ歸りて大津の城を守らんと思ふなり敵の真中ハ小勢を以て軍せん事尤くまき事なり汝ハ智勇を頼むと語らきしハ尾関涙を流し人々いくらもハ中ハ何と思召まして斯仰せんぞや此上ハ二つなしと答へくまくハ高次汝討死まべきやうゞ為ハ命を捨んとおもふ者多けまど謀を同じくまくる者稀ハとてあき汝偏ハ討死とのゝおもへるハ吾志ハ非まといくまくしくゞ尾関くゝ身ハあまりハ御詞を承りてハ骨をきさまきいかゞの堪ぐき事有りとも此の恩ハ報ゝ奉らんといひしゝぐ此の時銚子と俱ハ戦死せり後高次城を出らき くまくる時赤尾と山田と高次の輿の左右ハ供しくまくるを見て寄手の軍兵指をきゝらめ大膳者よと云ひあくり

一説ハ伊豆茨川口の敵を追拂んとて出くまくる時跡をゞ殿の久助内田太郎左衛門多賀孫左衛門等守りくまくるを寄手きびしくせむる久助手負て吾ハ本丸ハ引き退くんといふ内田聞きもあへゞ昔熊谷ゞ子の直家ハうす手あくハ討死せよ痛手あくゞ自害せよといひしゝ事弓箭取身の詞なり爰を逃んとハ口惜き事ハ大剛の伊豆ゞ弟ハ汝ゞ如き人の有りくまくるとて怪しくまくと罵りくまくり内田ハ銀の馬櫛を曹の立物ハ右くまくるハ銀の馬櫛よとゆめくまくるゆゞの物師なり敵今村掃部ゞ持口を破りて乱き入りしゝぐ伊豆ふくり返り見て三の丸いとくゝゆゝとて引き返へゝ人々敵既ハ攻め入りて入るべき方なしと京洲の丸より入らぐやといへども伊豆少もひるまぐ

初出る所より入りあんとそゆ〳〵しくるべくもとて槍を提て敵に向ふ伊豆に従ふ者四十五人下部は皆逃散て伊豆グ若黨一人平野藤兵衛と云ふ足輕一人殘り留まり伊豆むく立る敵を物とも せて蜘手十文字に追ひ立てさんぐに戰ひくるに敵尚烈しく進み来りし尾関甚右エ門銚子五郎兵衛二人土橋の上へ引て返し合はせ大音あげて存る子細ありて討死するよ寄て首をとりて面もふらぐ切死に ぞしくりくる其ひまに赤尾そのをつと行過きて城際に至る門の外の柵に簀戸の赤尾簀戸をメよとしへば平野静に簀戸をメよりて門を開くよといひしくぶ小齋法師武者にて門を固めて有しグ矢倉に上グり味方とを知らるど敵付入

にもべ一人は輕く城は重し爰に死まへき處ありやゝ討死せんまに是より見物せんといふ赤尾石によりくりて息をつき九尺斗なる槍を下に置きて脚半のひもを結び直す敵簀戸を破りて押し寄る處を八十餘人の兵とも爰を限りと面もふらぐ突くる赤尾ちぐくに緒をメ終りてつと立上り赤尾伊豆と云ふ知らるやと名乗て乱れ入る敵を念なく突退け追ひ出す少齊矢倉より鉄砲を嚴しく打ち出させくるべ立花の勢も餘りに手いくに防きて引退くくて少齋跪て槍の穂先を門のくぐり戸に當て一人で静に入まくるかくまるは無禮なれども門を守る法なりとて皆入終りて伊豆と平野と二人門外に殿して殘りくるグ平野

へ赤尾まづ入らんといふ赤尾へ平野も汝先入りて終に赤尾おくれて入りぬるといへり

赤尾伊豆へ美作が子あり信長に滅されて

信長江州小谷の城を攻む淺井長政勢盡て既に自害せんとする時不破河内を以て緣者のよしにて降參あるべ疎意あるべしと云へせられる長政降參すべき志に非るを近習の士ともよも別の子細もいまだ城を出て運を開うきいへといふさるぞ父下野守も共に疎意あるべ降參せんとて城を出るを信長見て長政何の面目有て今更の降參そと高声に呼せられぬ長政念て赤尾美作が宅に入て自殺せり淺井石見赤尾美作いざ切死せんとて入るを多兵押隔て生取て信長の前に出ぬ信長汝等長政をすゝめ朝倉に

くとして吾を敵とするに果を見よと罵られるに淺井居直り事新しき事を義景を別事あるべ立置んとの誓文其血もいまだうるはざるに越前に軍を出し是はよりて長政義の當る處にて義景に與しぬるに今日城を出よ疎意あるべしといられる詞を押たるに只自害と一決しられる若天運によりて家を立るあるべ信長を斯のごとくかくめんと思しるべ成べし義を知らぬ恥を知らるるに信長とそ人面獸心といへば信長弥怒て汝詞も似ず生ぬるべきに罵られる年老ぬ力及ばぬ昔より士の生捕となる事恥にあらず武勇を以て

敵を討得ず いらせらるゝうて人の國を亡まゝて恥なを見らきよ必下人る首を切らるべゝと罵り返せば信長杖を以て打とゝ石見打笑ひからめとる者るかゝるひあらゝきよき大將の禮儀るいゝおどもうてや犬坊と罵りゝるゞ石見も美作も終る殺さゝゝ

伊豆幼ゝゝゝ僧と成て多賀る匿き居る十二歳の時多賀明神の鳥居のもとゝゝて遊びゝる處をいづきの家の士るや十二人打連て通りゝる行あゝる士怒て小僧め無礼ありとて拳まて頭をゝゝ伊豆飛ゝゝゝ其の士の刀を抽て只一打る切りまゝゝゝ走りゝゝて赤尾るゝゝき居ゝゝゝ後京極る仕へゝゝ

立花宗茂使を城中るゝゝゝふ味方討死の中る十時傳右エ門と申き者ありゝゝゝき不便る存るゝゝ骸を返しゝゝゝへゝゝて物具の色を書て言送らきゝゝゝゝばやゝて返しぬ又城中よりも山田三右衛門ゝ首を返しゝゝゝと望きゝゝは曽を添て送らきゝゝゝ此れを大津の死骸返しゝて勇士死後のゝまを

高次大津の城を守りて固ゝゝゝゝば高野の木食上人を以て和平を執行ふ高次さゝゝ同心ありゝゝゝゝの長臣黒田伊豫寄手る心を通ゝゝゝ力ゝゝ和平しゝて城を出京都大佛の養源院る立寄りゝきよりゝ高野る赴く関ヶ原記る三井寺る立寄るとゝゝるハ謬りゝ三成亡びて後東照宮高次を召ゝゝる今度諸將皆大功有りゝ

人々なるは吾城一つ守りとゞまりし身の立ちまゝらん事口惜しく出らまゝば又使を以て御物語あるべき事あり尚出らまゝ我行くん年老たる身を労せんよりハ若役なると仰せ出さるゝ高次辞しゝ出て東照宮此の度城を攻めたる敵兵大垣に至る程なゝば関ヶ原の軍危うるべきに九州の大軍を数日隔らまゝゆゑこゞ軍の援とあるゝ事大津城中の軍兵残りなゝ関ヶ原に来りしよりも遥に増さまゝり敵より乞うる和平あまゝば恥あゝべと仰せらるる大津城の事あまゝば近江にて四十万石賜あべゝとまゝるる高次聞て賞せさせるるゝ関ヶ原にて大功の人なん百萬石を賜ハるべきゝ和ひもよゝべと固辞せさるゝ

一説関ヶ原の軍敗まゝて東照宮大津の城に入らせゝふ山岡道阿弥供奉しゝるゝ京極宰相よゝ持たるゝハに今少の事に本意を遂ぬとゝゝ御答あゝ奥平ゞ長篠にて武田を防ぎゝに戸障子に鉄砲の玉のあと鹿の子をゆひたるゞ如く土も落ち板もぬけたるをむしろをたゝみを立てゝ持たるゝへゝりたゞ仰せたる又高次の使者多賀孫右エ門大坂に参りたるに御前に召して京口の旗を早く志ゝ立りしゝ故敵攻入たると聞し召まゝゝ仰せ有りしゝを口惜く存ぜよゝいたして泪を流しゝりさて井伊本多に向ひ下部の中に木履に雪のつきたる如くなる御出馬にやあれあんどの如き城に高次あまゝばとて数日敵をぞ支へゆゑとゝひたまふ戯を

ある〻理あるうとぞ答へられ〻しとい〻う

○立花宗茂大津の城攻る足輕は縄ときくゝさせ其の縄目は玉藥の早合をたゝさませて箭をつゞふようも早く鉄砲を打せらるゝ〻

○又細川家の鉄砲ハ口藥入を革にて今世の左右ぐゝ帯の如く造りて用ふ事の急なる時指まてひもの入まて利あり又加賀の吉田大藏とて世に聞えし手ゝれの射手あり常に矢を取て俄に出る時十筋も持ちたき事のあるに腰にさせば走るに落るとて革にて角袋造りて緒を付て腰にさげそれに入まて腰にさゝし其の名を猿頭と名付ゝ

會津に向ゝせ給ふ時伏見の城に本丸に鳥居彦右エ門元忠二の丸に松平主殿頭家忠松平五左エ門松の丸に内藤弥次右エ門家長をおゝせ給ひ六月十六日東照宮打立ちたまひ十七日伏見の城に鳥居を召今度士卒少くして殘り止る事を仰有うしに元忠臣ハ存る所會津ハ強敵なり一人なり共召具せゝまて然こべし伏見に臣一人まて事足ぬ世上無支なりて変の出来ん時ハ近國に援ふべき味方もなく今の十倍の軍兵を殘し置ゝまてとも防ぐべきやうハなきとの成し時彦右エ門ハ十三まて初て出ゝしに年久しくもあるぬとて御物語る夜に深くハ元忠會津の御留守世に変あるべしひるんに復御目見も仕りぬ事あるに今夜ぞ

永き御別れとて座を立兼ねられしを東照宮御袖をも
て落る泪をあそばしてぞかへ給ふ石田兵を起せ
しかば伏見を攻むべきやと評定しけるを増田長盛城固く
て内府に名高きものとも有ハとやすく落べくもに
先ずなりて見んとて山川半平を使ひ元忠對面をきハ増
田が中はかん今度輝元秀家景勝徳川殿と弓箭をとり九州中
國の諸大名皆同心せきはいかハ此の城を請取やまへし
長盛久しく徳川殿の御恩深くはへバ此事然るべしと
ハ存ぜれども思慮の及ぶべきもあれ伏見の城ハ大閤きづ
きなりて今徳川殿姑くあづかりてませバ徳川殿の城
とやべきもあれとも城を出て内府に忠を致さるる道あら

んと存るよし言送りけれ元忠聞きて過しに内府會津に向
ひし時なりしに守りにんとやとられる敵に渡しる事ハ存しもよ
らぬ増田殿ハ内府に志有るゆゑなる事を述られる
旨心得られぬ若をあくと城を渡さんに同しくハ城を拠よ
せよとの使なりけれ奈しもやべしとく城を出よとハ
武將の詞にあるべき事とも存ぜれとく寄せられまよ討死せ
んと答へしを重て長盛に告るらへは渡邊勘兵衛有し
がつくづく聞て感じ入りて頻に涙を流しけれ長盛も我身も
をしき人を殺さん事のあはれきとて共に涙を流しけると
ぞくて三万餘りの寄手四方より攻めるるも少しもひるま
ず十日余防ぎるる甲賀の者内通して七月晦日の夜松の丸

る火をうちくべ寄手力を得て攻め入りける内藤は精兵の手きゝにて さゝ引き詰射ける矢に死人數をきゝ終る内藤父子も討死し主殿頭五左ヱ門を始めとして残る切死ぞきゝける元忠本丸に在て門を開かせ門際より六七間ちかくて士卒三百餘自刃を拔きそろへまぶまりくへつて待ちかけ寄手ちぐ〳〵攻め入り兼てこゝろひかるに元忠大音あゝ一人にても敵を討つて死にるぞ士の志なき吾三方ヶ原にて足に手負ひ行歩心にまかせざれども逃んとせんこそ足なき頼まれいざ家後の軍せよと下知する声を聞て一同に切つて出面もふらずに戰ひて一人も殘らず討死しかく元忠戰ひ疲れて玄関に腰をかけ息はゝ〳〵焚に雜賀孫市重次死骸を踏越てさ

とゝ見べ吾は鳥居彦右ヱ門よ首取て功名にせよとて物具脱て腹を切りしを雜賀其首を取りさゝ〳〵本丸に二つの門あり〳〵るを大手の外は堅く鎖して〳〵べ一人も逃ちる者なく討死しるとぞ後元忠の首を大坂京橋に梟せを京の商佐野四郎右ヱ門と云ふもの鳥居に乞ひしかる忠義の人の首を惡逆の罪人と同じくさゝも事やあるとて夜深て盗取智恩院に葬りて一宇を建龍見院と名付くを石田聞べ必定刑罰せべしせんなき事なりと云ふる者あり佐野吾久〳〵恩を受し身なれば白刃をふむまでこそあらめ是程の事は人の義なきは禽獸なり人生て死せさる事なし刑罰なきもこそ〳〵べとぞいひける

雑賀孫市後水戸中納言家に仕へさりしが ある時中ごろを以て鳥居忠政のもとへ云送りくるゝ重次むかしの伏見の城にて元忠の御最期に参りあひ其時の御物具吾家に取傳へしひぬ先考の御形見にて御覧ぜん為返し参らせ度こそいとくゝしく忠政悦んでありき父が形見是に過べくゝば一目見だやと答ふ重次自ら携てゆきむかふ忠政門外に出迎へ重次を奥の間に招し亡父に再對面の心地にて涙を流し甲冑太刀刀をし板の上にかきて居て是を拜しさて今日重次を饗せし有様誠に美盡せり其翌日重次の方に使を立昨日の見参を謝す又重次の御志によりて父が家後に帯せし物具再ひ見ん事返くゝも悦入存しぬひぬ忠政が家に傳へし父が形見に見るべき物もまくゝに見苦しうはべれども此の物具重次の家にとゝめ御武名を子孫に傳へらるん事引箭の道にはよりて御遺戒にもやはべりて甲冑太刀くゝとゝ返し遣はしぬ

○

五領使者にあらせてまるゝと水戸に贈り遣はし音信を通さる事忠政が一期のおぼえ終にもとゝて水戸公此の由聞しめ大に感じ給ひ鳥居が使者の来るべき前道梁を修理をさせ重次に客儲さべき魚鳥ゆゝの物賜ひくるとぞ

筑前中納言秀詮先陣の士大將平岡石見松野主馬各禄一万石ありし伏見の城攻めに主馬が仕寄の竹把を城中より火箭を射焼くゝしかば其の所を退きて竹把を付けんといへども

村上三右エ門聞入まぢ焼跡ゑ竹把を付ぎ〜てハあるべくこれと
て主馬と相謀て竹把を付直し竹把の上ゑ〻土をぬるべき用
意しく〻主馬外ゑ出る事を嫌ふ人〻ハ士とゝ内まて土
をとゝのゝきよの又土をぬりこん者ゑ中間下人ゑ士
とぜんと下知しくれば下部八人出て土をぬりこゝ其の
後竹把を焼ぎりしとゝりゝ旗本ゑ大嶋源二といふ者使ゑ
来り仕寄場より堀端まで間數幾許ゝあると問ふる村上間を
打ちてハ見ゆぐ〻ぞ凡十二間許りゆあんと答ふ大島とても
の事ゑ聞を打うんとゝへバ城近く箭玉の飛来る所ゑ強ゝを
出して何の為ぞといふ源二殿ゑ問まて間をうゝびというん
も快〻ぐ〻といひ〻ふ村上旗本の使ゑ先陣の間をうゝき

る事ハ有まぢ〻て村上静ゑ出て竹を開竿ゑ切一間づゝうゝ
源二先へ廻りゝる一つ二つとさ〻終ぶ十一間半也大
島村上進退のゝるまひ見物ありしと云ひあへりしゑ源二ハ
二十二歳伏見落城の日討死しくるとぞ
三刀谷監物孝和ハ其の先祖兼久の乱ゑ軍功有りて出雲の三
刀谷の郷を賜ゝりくるとよりて氏ゝ〻しくり其の末雲州尼子
の旗下ゑ属しくり孝和が父彈正左エ門久扶毛利家ゑ奉公し
くるぐ後仕を止て終りぬ孝和ハ吉田兼治ゑさとりて吉田ゑ
居ゝりしを関ケ原の時安國寺北村五郎右エ門を使ゑてまゑ
きくるぐも聞き入まを細川幽齋の丹後田邊の城ゑ行きて力
を合ハせんとゝを従者ども奥州ハ大國ゝ景勝勇將ありいて

破るべき西國一同に石田に與しぬ　徳川家の危き事近きにあり何として安國寺が招をいなまんぞと云ひける孝和聞て石田島津に叛き内府を引き付け軍を起させあらんて京大坂を取りたらん謀て然るべく徳川家の領國其の便よき會津に手始をしるハ無謀なり三成必定勝べからぬて吉田家ハ幽齋と縁者なりしかば田邊に行きて大敵に向ふべきまゝにしかども持こたへしハ偏に孝和が智勇にまかせる故なり

大坂の軍兵一万七千を以て田邊の城を攻る細川忠興ハ奥州に赴き父幽齋城にあり三刀谷孝和大剛の人にて度々切つて出防ぎ戰ふ幽齋和歌に長じたる人なり古今集の秘訣為家卿の授されしを殊に秘藏せしが兵火の為に焚ん事を惜光院知仁親王慮らせ給ひ使を以て古今集源氏物語を禁裏にまゐらせよとありしに又烏丸大納言光宣卿勅命を奉りて城に赴きぬるとも此書を奉るとて

いにしへも今もくちぬ世中にとゝまるのこりを殘す言の葉

又烏丸光廣卿の歌に封ずる歌書をやるとて

ゆ草くきあつめてはるかなる沼とゝまるせ和歌の浦浪

斯る處に前田徳善院を禁裏に召田邊の城責和平の事を勅命あり寄手ことを解て幽齋城を出られたり光廣卿幽齋の許より送らるゝ書いまゝ封をひらきぬ　ざりたるゞ

あらて見ぬ玉もあらくに玉手箱あけてくやしき返せ浦島の波

幽齋くへしよ

浦潟やひくをまつへて玉もかれあらてうらみ見をくへきを波哉

一説藤原公國卿早世ありて其子實條卿幼くしくして和歌の口傳を幽齋に傳へられたり後に幽齋實條卿を田邊の城に迎へとりて養育し悉授けられしに古今集の説に未傳へられざる中に朝鮮征伐の事起りしかば弓矢取身に討死のおどきとりぐしとして古今傳授の事書たる書の箱を烏丸大納言光廣卿へ贈られ預けまゐらせる間に朝鮮に渡り若討死せば實條卿へ渡しまゐらせ歌人の國ひくや八島も治りてふるひくへせ和歌の浦浪

りしに草くき集めたる詠とめて むくしに久せ和歌の浦波

光廣卿のくへし

第代をちくひしに氣の続きたまひくでうあるんうう詠くれて

其の後秀吉遺言して豊後臼杵を幽齋の男忠興に くへあくへ

らるくに光廣卿より管をくへまくて

あくて見ぬうひもありくむをふるひくへる浦潟の波

幽齋田邊の城を守らるに時勅命により三條大納言實條卿

へ附し傳へられしに一首の歌あり

いくしくも今もうつくしね世中にくあのくをはをしくの

古田助左エ門（古田兵部少輔重勝に仕へて禄千石を受く景

勝を征伐の時重勝伊勢の松坂の城に助左エ門を置きくり三

成兵を起せ〻時大坂の重勝の屋敷をとりこと松坂の城を渡さんは重勝の北の方を殺害まべしといひ送りしを助左エ門此の城へ殿の仰せなくて人を渡さん事存もよらん若さあらぎゝ北の方害るあひなきんとや誠まことまことき事あるもいとるせん妻子の死まるぐ悲しきとて城を敵に渡せしと殿を人議りやべ運盡らべ死を潔ゝまる事弓箭とる身の習ひなり人々は大坂の屋敷にいらるも成りへ敵やげて城に寄来らぐ散やる軍して討死し冥途にて對面せんと大坂の屋敷に敷る云送りくりくる處に重勝も東國より帰り来り松坂に籠る此の時富田信濃守信高阿濃津を守らまゝ加勢を重勝に乞ふ兵を分ちやるべき体のあらり〻まべ助左エ門阿濃津へ加勢あらん事尤望む所なり敵阿濃津を落て其の後爰に攻来らん若阿濃津落ざる前に東方の味方来らば敵敗北せん其の時は古田が士は敵の旗をぐる見ば富田が力に松坂を持ちこりまると人に笑はべし又加勢あらば隣國相援ふの義に叶ひ又阿濃津にて敵を防ぎ〻は古田が加勢の故なりと世に申べしと勧めて五百人の軍兵を阿濃津にやりくりやげて重勝の領知の百姓の中に大家なる者二十人を士とし城にとゝせ後に百石の地をあらふべしと約し是人質の心にて百姓をさらぐせしとの術なり関ケ原の乱治りて後重勝約に背んとせゝらば助左エ門信を失ふは君の道にあらぐる言葉は金石よりも堅くまべき

事あり是より後又欺んどて百姓どもに何事も聞き入まじく
ト信あるべく立ずとも事のゆ臣ゲ禄地を分ちあるべしと
いひくまぐ重勝約の如くせられそうり

常山紀談巻之十四 終

常山紀談

六、七

1.85.1
合8
116